武者小路実篤とトルストイ（その四）
――〈新しき村〉を中心として――

阿部軍治

17 〈新しき村〉建設の運動

武者小路の〈新しき村〉に関しては、本稿仕上げの段階に、武者小路研究の第一人者である大津山国夫が長年の調査研究を纏めた新しい労作『武者小路実篤研究――実篤と新しき村――』[1]を発表している。同書には、〈村〉建設に至る武者小路の精神的な歩みや、その目的と思想、〈村〉の生活、そしてその住民ひとりひとりについて詳細に述べられており、このテーマに関してはこの上論ずべきことはあまり残されていないようにも思われるが、ここでは主にトルストイとの関係において、といっても、やはり同書と重なる部分もあると思うが、見て行きたい。〈村〉の生活の細部については氏の著書を参考にさせていただいたことを、感謝をこめて記しておきたい。

武者小路はトルストイ思想の感化などもあって、大正七（一九一八）年に、同志を募って宮崎県日向に心の中でひそかにあたためてきた理想郷〈新しき村〉を建設した。彼はその種のユートピアの創造を青年時代に夢見ていたが、

それから雌伏十数年、彼はその実現に向かって動き出したのである。彼が三三歳の時であった。

その年の四月から六月頃にかけて武者小路は三つの対話からなる「新しき村に就ての対話」を執筆し、〈村〉建設の構想について述べ、次第にその具体的なプランを明らかにして行った。実篤はその中で先生の口を借りて、「第一の対話」では、自分たちが「農夫と労働者の御蔭で生きてゐる」（第二三巻二〇三頁、巻数のみが書いてある場合、本稿「その三」までと同様、特にことわらない限りそれは新潮社版の全集を指す）こと、万人が適性に応じて働かねばならないことなどを述べ、「第二の対話」ではそのために、同志数十人で不便な田舎でもいいので土地を取得して実験的な〈新しき村〉を建設し、共同で労働し生活することを試みたいこと、「第三の対話」ではそれは困難な事業ではあるが、たとえ小さくても「人類にたいする信仰」（二三六頁）をもって人々のためにやる価値があること(2)などを語り、また、雑誌『新しき村』の発行を予告していた。そして、同じくその年六月執筆の「新しき村の小問答」の中では、「新しき村と云ふのは、一言で云へば皆が協力して共産的に生活し、そして各自の天職を全うしようと云ふのだ。皆がつまり兄弟のやうになつてお互に助けあつて、自己を完成するやうにつとめようと云ふのだ」（『新しき村に就ての感想』第二三巻二五三頁）、と彼は書いていた。

また、それと同じ頃、つまり七年六月か七月の執筆と思われるエッセー「『新しき村』の生活の序文」の中でも、彼は〈新しき村〉の生活の構想めいたものを語ったのだった。その中で彼はその目的は生活改造と自己の生長と同志を得ることであり、その三つは一つだとしてこう述べていた。「自分達は先づ自己の生活を改造する。新しき世界に最も調和しやすい生活をこの世で生活して見せる、かくて個人の生活を改造する。我々は自己を最も人間らしく生かすことから始めるよき花がさき、よき実がむすぶには、よき生活が必要だ。自分達にとつては実をむすぶだけが目的ではない。よき花を咲かせることも、自己をよく生長させることも自分達の目的だ、三つは一つだ。自分を先づ生かさう、そして思想の花を咲かせ、そして実をむすび同志を得る。自己を生かすことは、思想を生かすことで、同時に同志を

ふやすことを意味する。この三つは一つである」。つまり、〈村〉の建設によって一石二鳥ならぬ一石三鳥を意図していたわけである。そこでどのような生活を目指していたかというと、「『新しき村』の住民はより人間らしく生きればいゝのだ」、「この世に一人でも多く人間らしい生活をするものがふえてゆくことは、我等のよろこびだ」としている。この一文は「新しき村」建設についての宣言であり、同時に次のような同好の士を募る広告でもあった。「同感の士はますます同感を感じてぢつとしてゐられなくなつたら自分達の仲間になつてほしい。それは自分達にとつて無上のよろこびだ」(3)。

そして、大正七年五月には、予め世間の批判に予防線でも張るかのように、かなり勢い込んでこうも語っていた。

「自分は日本の何処かに、(東京より一日でゆける範囲内で出来たらさがしたいと今は思つてゐる)同志の人と協力の生活をしたく思つてゐる。(中略)／万万が一失敗しても、失敗しても得をして見せる。・・・その仕事は見えた処で失敗しても、見えない処で不滅な仕事をする。(中略)／ともかく彼等のひからびた種はいくらまいても碌な芽は出ないが、自分達のまく種には一々生気がこもつてゐる。いゝ土地におちればはえないわけにはゆくまい。／自分達は〈新らしき村〉と云ふ種をまくことによつて、新らしき村を収穫して見せる。・・・／そして新らしき村が出来たら、其処で皆と一緒になつて、一番気持のいゝ生活をして、そして各自自分の仕事に骨折らう。愛するもの及び仲間の為に働かう、そして一緒に喜び、一緒に心配しやう。(中略) 我等の道はまちがつてはゐない」(雑誌『白樺』七年六月号雑記欄、小学館全集第三巻六二五、六頁)。これは〈村〉建設の強い意欲を語っているが、それに不退転の決意でのぞんでいることを世間にも、そして自分にも語っているようにとれる。

武者小路が〈新しき村〉創設を初めて考えたのは、『或る男』などの彼の著作によれば、彼がトルストイに心酔していた学生の頃であった。それは彼がトルストイの思想に感化されて、社会は不公正にできていて、自分を含め人々の生活が間違っていることを強く思い知らされ、生活を変える必要を感じさせられたからであったという。『或る男』に

よれば、彼は二二歳の時に〈新しき村〉に似た理想郷を想像し、夢の形で描き残したのであった（一九〇六年一一月二〇日付け）。その村では百五六十人の人たちが皆親子兄弟姉妹のように共同で農作業をし、仲むじましく暮らしているのである。武者小路は「これはトルストイの影響をうけてかいたもの」らしく、「彼が新しき村の仕事を始めだす前に十何年の間、たえず何処かでさう云ふ仕事をしたいと考へてゐたことは、之でもはつきりすると思つてゐる。彼にとつては文学をやらうと思つたのと、新しき世界を生み出したいと思つたのとは、殆んど同時である。それは彼の双生児である」（第三巻一八三～一八六頁）というのであった。これで分かるように、彼の文学選択にしろ〈新しき村〉建設にしろ、それらは彼が生み出した「双生児」としてトルストイの感化が主要因ではあったし、はたからはかなりドンキホーテ的に見える後者の実践も、彼にとっては心の奥底で十年以上も暖めた前者同様避けては通れない人生の選択であったということなのである。

そもそも武者小路には寄食的な生活を繰り返し批判するトルストイの言葉がずっと重くのしかかっていたのである。彼はそのことを何度も語っているが、大正四年三月初めに書いた随想「自分の良心」（『白樺』四・四雑感）の中ではそれに関してこう述べている。「自分は労働しないで食つてゆくことを何と云つても一番耻じる。この耻はトルストイから与へられた。この耻は自分の一生につきまとうであらう。そのすまない感じが又自分に愛他的の仕事をさせやうともする。自分はこの耻を直接になほすことが出来るやうな仕事があれば、自分の仕事以外の仕事でもする心算だ。（中略）／自分はそのすまない気を何処かで何時かなくすやうな事をしたい。（中略）／・・・自分はそのひけ目を、自分にのみ許されてゐる仕事で出来るだけとりかへしたく思つてゐる。自分の仕事は人類的愛を呼びさますことでありたい」（小学館全集第三巻四五二頁）。まさしく「この耻」をそそぐ仕事、引け目を払拭する仕事が〈新しき村〉の運動であったのである。これから四〇年後彼は、「新しき村で立派な一人前の労働者となって、生きる事を考えて、村をつくった事は事実である」[4]、と語っている。また、労働としてほかでもなくなぜ百姓の仕事を選んだについては、

武者小路はこう述べている。「それは百姓の労働が一番もとだからだ。／衣食住をただにするには百姓の労働が一番近道だ。それ以上の生活はそれからだ。先ず自分達の労働で自分達の衣食住をただで得られる身分になりたい。そうなれば気持がいい。・・・」(5)。これはまさにトルストイがつねづね語っていたことであり、トルストイ主義の実践そのものであったのである。この意味では武者小路は徳富蘆花以上にトルストイ主義を生真面目に実行しようとしていたのだと言えるのである。

大津山も武者小路を「新しき村」建設に追い込んだのは、徒食の階級としての自覚が彼には片時も忘れられない負い目になっていたからだという見方を示している。「〈新しき〉村は、理想郷を建設する目的と同時に、あるいはそれ以上に、この負い目を一挙に解消する手段として選ばれたのである。理想郷に貴族と平民の区別があるはずはない。〈新しき村〉はトルストイ主義の武者小路的転生であった」(6)。別の箇所でも氏は、「富める者は禍である」というトルストイ直伝の思想、「自分の享受している特権が不当なものであるとする罪の意識」(6)は、メーテルリンクや何物をもってしても追放できず、村創設へ進まざるをえなかった、と述べている。筆者もこれはほぼ氏の主張の通りであったろうと思っている。だが他面から見れば、このことはそのまま武者小路の中にトルストイ主義がどれほど深く根をおろしていたかということ、彼がトルストイ主義から一定程度離れたときでも、それは表層的な面においてであり、彼の中の深層面においてはトルストイ主義は脈々と生き続けていたということを証左していたのだと考えたい。

新しき村創設の事情はいろいろあるが、その主要な理由を武者小路自身は「生涯を顧みて人生を語る」の中に書いている。それによれば、一番大きな理由として彼は、「トルストイによつて播かれた種が、枯れ切つてゐなかつた」ということを挙げているのである。そして、第二には叔父さんの「半農生活に若い時憧れを」持っていたこと、第三には、「自分に本当の子供がなかつたから」だと思うと。しかし、この場合より重要なのは「自分の生命の要求から来」たもので、それは一日二三時間の執筆時間以外の空虚な時間で、「何か他人の為に働く仕事をしたい」（第二四巻四四

三、四四四頁）と思っていたことだったと述べている。第二の理由にはかつて徳富蘆花の東京郊外での田園生活を見て憧れを抱いたということも与っていたであろう。とにかくこれは彼が熱病のように〝トルストイの洗礼〟を受けてから三四年立ってからのことなのである。従って、新しき村思想には濃厚にトルストイズムが看取されたのである。

しかしそれらは〈村〉建設の動機づけとしてはまだ十分でないように見える。それには建設せずにはいられなかったより大きな個人的・社会的要因が介在していたはずである。大津山は〈新しき村〉提唱には武者小路の三つの願いがこめられていたと見る。第一の願いは、階級と搾取のない、万民平等の理想国家の建設、第二の願いは、共生農園の創造。自愛と他愛、自立と連帯、文化と労働、などの調和した、共産の友愛社会をつくろうとした。第三の願いは、武者小路個人の生活改造。・・・〈人類〉にたいする義務として肉体労働を分担しようとした。そのことによって、・・・有産の負い目、徒食の負い目からの解放を願った、のだと。

〈村〉建設に関しては武者小路自身いろいろなことを語っているが、筆者もそれらを要約すればほぼこのようなことになるだろうと考えている。そして、その三つの願いともいずれもトルストイによって蒔かれた種子から生え育ってきたものであるとも思うしだいである。しかも、〈村〉ではトルストイの誕生日を休日とするなど、全体的にトルストイの存在がかなり大きかったと思われるのだ。例えば、〈村〉発行の雑誌『新しき村』には初めの頃からトルストイの物が掲載されたり彼についていの言及が見られるのである(7)。なお、これについてはあとで改めて取り上げることにしたい。

日露戦争での勝利で日本の国際的な地位は高かまり、経済を含めて社会活動全体が活発化してくるが、大正初めの第一次大戦はわが国の産業活動をいっそう活性化し、経済的な繁栄をもたらすことになった。当然それに伴いもろもろの社会運動も盛んになってくるし、明治以来の国家意識に対して個人意識が覚醒され、そしてある種の自由が許容され、比較的自由な言論活動が可能になり、いわゆる〝大正デモクラシー〟が現出することになった。その状況のも

とで文化界が活性化し、そして、社会と文化の大衆化が進み、文学界では〈白樺派〉などの自然派以外の色々な流派が現れて、その活動は極めて活発になって行った。しかし他方では社会的諸矛盾が表面化して吹き出し、労働争議や米騒動なども頻繁に起こってくるようになる。そして、ロシア革命の影響もあり社会主義や労働運動が強まり、それから、プロレタリア文学運動も現れてくる。それでもとにかく、大正期は総じて日本社会はまだ比較的自由であり、デモクラチックな雰囲気におおわれていたと見るがことができると思うが、そのような条件下武者小路らは彼の人道主義の象徴としての〈新しき村〉建設に乗り出すのである。トルストイも彼の人道主義もそのような社会環境の中で極めて広範に受け入れられ拡散したと思うが、あるいは逆に、それらはそのような社会環境の招来にいくぶんか一役をかったと言ってもいいかもしれない。すなわち、武者小路らの〈新しき村〉建設は当然このような時代状況と無縁ではなかったであろう。

そして、たぶん武者小路らの〈村〉構想実現には、部分的にはロシアにおける社会主義政権の樹立、共産主義社会建設という歴史的事件の影響も与っていたと考えられるである。武者小路はロシアは日露戦争の敵国であったにもかかわらず、ロシアにはトルストイ、ドストエフスキーの産んだ国として、ロシア文学の故郷として大きな関心を寄せていた。一九一七年の二月革命と十月革命にも、彼は当然大きな注意をはらっていた。彼は二月革命が勃発したとの報道に接してすぐ、三月二三、四日頃に、次のような感想を書き記している。「ロシヤに革命が起つた、ことの成りゆきをよく見たいと思ふが、思想の自由の認め方や、猶太人にたいする態度や、死刑を全く廃止する処などを見ると、中々進んだ思想にあふ（ママ）、合理的な、人道的な国家を起さうとしてゐるやうに見える。・・・支那の革命なぞよりはさすがに進んでゐる。フランス革命を文明的にしたやうな処がある。・・・今迄の処ではさすがに偉大な思想家を沢山出した国らしい処がある。最も進んだ、合理的国家の実現をしてほしいものだ」（『白樺』大正六年四月号六号雑記、小学館全集第三巻七四二頁）。このように彼は二月の所謂ブルジョア革命に関しては多大の期待を抱いたのである。この日

か、翌日書いたメモの中には「しかし恐ろしい時は近づきつゝあるやうに思ふ」ともある。彼は二月革命に続いて何かが起こり、世界が何か大きく変化して行くように感じたとも受け取れる。とにかくこれに関しては、一九二二年九月執筆の「新しき村について」の中でも、彼は「新しき村の仕事を始めたく思つたのは今より五年前の春だつた」（初出『婦人公論』二二年一一月号、小学館全集第五巻三九九頁から引用）と書いている。つまり、これによっても現実的に〈村〉を建設しようとしたのは、ロシア革命勃発直後の一九一七年の春ということになるのである。

そして上記雑記の数日後の三月末に、武者小路はロシア革命に関連した三つの随想「労働の義務」「合理的社会には」「合理的になる方が」（大正六年五月『太陽』第二三巻五号発表）を執筆している。その中の「労働の義務」ではAとBが世の中の富の分配が不公平であることに関して意見を交換するのだが、そこでBはこう語る。

「・・・たしかに今の世は金の分配がまちがつてゐる。それからいろ〳〵の不幸が起つてくる。またいろ〳〵の不平が起つてくる。たしかにその点はこの社会の病点だ。我々はある個人、それも我々が尊敬出来ない個人の為に働らくと云ふのはまちがつてゐる。・・・もつとよき時代が来ていゝはずと思つてゐる。遅かれ早かれ革命は世界的におこるにちがいない。それはもつと世の中が合理的になる為だ。もつと個人的であり、もつと自由であり、そしてもつと人類的でなければならない。（中略）・・・我々は・・食物をつくる為には出来るだけ経済的にはたらかなければならない。今の百姓は少し義務が重すぎる。そのやうに礦業や、漁業なぞも、人類に必要品は我々が一様に生産する為に働く義務がある。それは人類の要求の為に人類が働くのだ。（中略）・・・我々は人類皆労働者になる義務があり、・・・なるべくその労働は身体と精神を不健全なものにしない程度にしなければならない。そしてその一定の義務を果たしたものは何人でも自分の勝手なことが出来る、一定の土地と衣食住はもらへる」（小学館全集第三巻二二五頁から引用）。

これは明らかに、この年の夏に武者小路が語った〈新しき村〉についての上掲の構想と符合している。この翌日書

いた「合理的社会には」の中では、彼は「・・・自分は理想的な社会が自分の生きてゐる中には来ないと思ふ。／しかしさう云ふ時が来てすべての人が労働する義務を分担する時がくる迄には少しは労働が出来る資格をつくつておかうかと思つてゐる」と語っている（同巻二二七頁）。また、やはり同日書いた「合理的なる方が」の中では、明治維新を「多くの人を幸福にした」、そして「人間の生活を合理的にした可なり大きな革命」と捉え、ロシア革命もそれに類する不合理な社会を正す変革と見なしてこう述べる。「・・・世界的に社会が一歩進まなければならない処に逢遇してゐることは心ある人は皆感じてゐる。ロシヤの革命がその暁鐘になることを自分はのぞんでゐる」（第三巻二二八頁）。もっとも、彼は、それほど進歩しないだろうし、自分は共和政治もあまり好まない、とも語るのである。

また他方においては、武者小路はロシアやその他の国々で農園など共産的共同体が作られ、トルストイ主義が実践されつつあったということを知っていたのではないかと思われるのである。ロシア内のそれに関しては、彼自身が後年評伝『トルストイ』の中で触れていることは上述した通りである。彼はそこで、当時ロシアでは〈土地共産的組合〉が各地に起こったといった紹介の仕方をしていた(8)。そして、トルストイ自身はこの種の試みには批判的であったことまで書いている。これはビリューコフのトルストイ伝に依ったものだった。〈新しき村〉構想の頃には武者小路はまだ当然この本を読んでいないが、他の資料や情報から知り得たと想像されるからである。同書のロシア語原書はロシアでは革命前に三巻本が刊行されていたが、その後革命や内戦の混乱でロシアでは一時再版が困難になり、第三巻などにこの作家の二〇世紀在生の分などが大幅に増補改訂されて、一九二一年にベルリンのラドウイジニコフ社から出版されたのだった。日本ではその後者の版が一九二六年～二八年に原久一郎によって訳出されたが、未完に終わり、同じ翻訳者によって全訳出版されたのは、終戦後一九六八～六九年であった(9)。武者小路はこのほかにも、一九二八年に雑誌『大調和』に「レフ・トルストイ伝（1～3）」（少年期までの生い立ちを中心にした伝記）を掲載したが、それも原久一郎の翻訳を参考にしてまとめたものであった。それから、日本ではこの種のことは徳富蘆花から始まり、

江渡狄嶺などによって試みられていたが、それらにも何等かの刺激を受けたことも考えられるのではあるまいか。彼は蘆花の所のほかに狄嶺のもとにも何度か訪れているのである。

武者小路は〈村〉建設に先立ち、「村の精神及会則」を決めていた。その前半部分にはこう述べられていた。「一、全世界の人間が天命を全うし、各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする。一、その為に、自己を生かす為に他人の自我を害してはいけない。一、その為に自己を正しく生かすようにする。自分の快楽、幸福、自由の為に、他人の天命と正しき要求を害してはいけない。一、全世界の人間が我等と同一の精神をもち、同一の生活方法をとることで、全世界の人間が同じく義務を果せ、自由を楽しみ、正しく生きられ、天命（個性もふくむ）を全うすることが出来る道を歩くように心がける。一、かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能を信じ、それを全世界の人が実行することを祈るもの、又は切に望むもの、それは新しき村の会員である。我等の兄弟姉妹である。（後略）」(10)。

これは〈村〉の「会則」というより「精神」か、趣旨か目的であり、しかも、現実やその実現性をあまり顧慮せずに、こうあるべきであるという組織の精神を述べたものであり、かなりおおまかなものではあった。実際の集団生活ではこれだけでは足りないわけで、そこで開村から二年後の二〇年一二月に「会則」を改正している。会員を第一種会員と第二種会員に分け、「第一種会員は、義務労働を自ら進んで果すことを要す」る人とし、「第二種会員には誰もなれる」と規定したのである。また、「一、第一種会員は、自分の持っている金は無条件に村におさめる。但し、自分の財産を処分するのには入村後一年間の余裕を与う。一年村に住んで見た上でいよ〳〵入村することにきまった時、財産を無条件で村の処理に任せる。・・・一、第一種会員は土地を私有する事は出来ない。土地は村のものでなければならない。（中略）一、第二種会員は、村の精神を一般の人につたえるようになるべく務めること。及び、村の仕事をたすけ、村の仕事を完成するよう心がけること。無理せずに会費をおさめられるものは、月一口（五十銭）以上、村

に喜捨すること」(10)、と規定している。

これらを見ると〈新しき村〉は全く一種の理想主義的な精神運動であったように思う。この会則では〈村〉は共産制をとる以上原則的には私有財産を認めず、武者小路自身が自分の家をそうしたように財産は〈村〉に寄付する建て前であり、この辺は昨今問題を起こしている新興宗教集団のそれに類似していたわけであるが、〈新しき村〉の場合は猶予期間をもうけたり、強制をしなかったところなどが後者とは大いに異なっていたであろう。そして現実にそれを実行したのは武者小路を除くとひとりだけであり(11)、その点は不徹底と言えば不徹底であった。第二種会員について言えば、〈村〉に住みもしないそのような村外会員がどうして必要なのか、そのような人が現れるのか、一般の人には最初は不可解ではなかったかと思われるが、じきに〈村〉はその生産だけでは存立できず、その存在は不可欠であることを証明したのである。それにしても、〈村〉に住みもせず、受益と言えば〈村〉発行の雑誌を受け取るぐらいなのに、毎月会費（会費というより喜捨であるが）を払うというのは現在ならあまり考えられそうもないことと思うが、現実には村外会員になる人が多数存在したというのは驚きであった。当時は〈村〉建設は大きな反響を呼び起こし、あとで見るようにどちらかと言うと批判的な意見が多かったが、その精神と趣旨を理解し賛同する人も多数存在したのである。

18 〈新しき村〉の生活

〈新しき村〉の生活に関してはその主宰者武者小路自身や〈村〉の住民であった木村荘太や川島伝吉や上野満や清水準蔵、第二の〈村〉の関係者である永見七郎や渡辺貫二らによって纏められているし(12)、また、大津山国夫と伊藤信吉などの詳細な研究や報告があり、ここで改めて詳しく紹介する必要はないであろう。ただそこでどのような生活

が営まれていたかをざっと知っておくために、その概略を述べておきたいと思う。

武者小路は大正七年一一月に共同体〈新しき村〉のための土地を買い、その同好の士たちと共に入植した(13)。入植地は宮崎県日向児湯郡木城村、石河内字城という所であった。昔お城があった所なのでそのような名前で呼ばれていたらしい。そこは擦鉢の底のように、四方高い山に囲まれていて、「・・・峠から見おろすと、真正面に三段の高低が出来て川に三方かこまれ、後ろは高い山につゞき、崖には青々と木のしげつている・・・」（小学館全集第四巻五三、五八頁）所であった。そして城は石河内の村とは川（小丸川）によってへだてられていて如何にも別天地に見えたのである。

大津山の調査に基づけば、初めに大正七年一一月〜八年一月に二町一反一九歩を一〇一七円四四銭（一反四八円平均）で、ついで八年一一月に四反三畝一九歩を五〇〇円（一反一一五円平均）で購入した。全体では二町五反四畝八歩をおよそ一五〇〇円（一反六〇円平均）で買ったことになる。その内訳は畑が二町五反二〇歩、山林三畝九歩、宅地九歩であった。土地購入費や一年目の諸費用は印税などの武者小路自身の支出金と実家からの寄付金、それに一口五〇銭で募った村外会員の会費（その会員数は七年一二月現在一六四名であったという(14)）などでまかなわれた。それとは別に八年一二月に城の官有地の原野一町七反二一歩を借地した（「土地」第四巻五七、五八頁、「新しき村について」第五巻四〇一頁）(15)。このように入手した土地は畑と原野であったが、これでは自立的な生活が不可能なので、畑は可能な限り次第に水田に作り替えられて行き、原野も開墾された。当然土地が足りなかったので、大正九年隣村の川南村萱根ケネに山林四町三反九畝、畑一町一反二四歩、合計五町五反二四歩の土地を入手している(15)。だが、それでも十分ではなかったのだ。それでも多くの人が指摘し、素人目にも分かるように、これらの土地で小規模とはいえ二〇〜四〇名から成る一つの村の生活を支えることは所詮無理であるのは明らかだったのである。

〈村〉への一年目の入植者は子供二人を含めて一八人で、二年目に八、九人が加わったが、他方でその年作家でト

ルストイアンの木村荘太（新妻を伴って入植していた）など数名が早くも離村している。彼は構想段階から積極的に参加した〈村〉の最初の住民のひとりであった。各人それぞれ希望に燃えての入村であったが、実際にはいわば開拓農民みたいなものであり、〈村〉の現実の生活はその掲げた理想とは裏腹に厳しいものであり、万事計画や思い通りに行くわけがなかったのだ。〈新しき村〉は当時の著名な作家の理想郷建設の試みということで、提唱の段階から社会的な反響も大きく、かなりの興味を呼び、入村希望者も多く、現実にも入る人がかなり多かったのであるが、出て行く人も多く、入れ替わりがかなりはげしかったのである。木村はその構想段階から積極的に〈村〉建設に関わり、土地探しにも加わり、実篤と共に〈村〉を代表する住民のひとりであったが、〈村〉の内紛に嫌気がさして去ることになったのだった。武者小路の友人で詩人の千家元麿は大正八年四月に実篤の強い勧めで入村したが、一〇日ほどで逃げ帰ったのであった。それでも〈村〉の人口は次第に増えて行き、建設から満三年過ぎた二一（大正一〇）年一二月、四〇人になる。そのうち女性七人、子供四人であった(16)。住民に出入りがあるので村の正確な住民数は言いにくいのであるが、大正末あるいは昭和元年までは三〇～四〇人と見ることができる。そして、そこには二人の朝鮮人が含まれていて、四海同胞の原則が貫かれていたのである。大津山の書くところによれば、大正一二年末までに延べ人数で、大人一一六人、子供一二人、計一二八人が入村したという(17)。いずれにしろ、それは規模は小さかったが、階級のない、皆が共に働き、生活する共生社会を実験した壮大な事業、一大社会運動の試みであった。

入植者たちはそこで共同して畑を耕し、生活を営み、食事も共にしたのであった。初めは暗いうちから起きて、暗くなるまで無我夢中で働いたという（「新しき村について」小学館全集第五巻四〇〇頁）。原則的には一日に八時間働くことになっていたらしいが、季節にもよるが農作業を朝七時から夕方五時頃まで行うこともあったらしい（「手紙三つ」第四巻五九五頁、「新しき村について」第五巻四〇一頁）。雨天の日は午前一一時までは自由時間で、その後は部屋片付けをしたり縄をなったりした。後年〈村〉の住民となった上野満は義務労働時間は一日六時間であとは自由で

何をやってもよかったと書いている[18]。毎月の五の日は休日で、その外に釈迦とキリストの誕生日や、ロダンや、トルストイの誕生日などが村の祭日として休みになった。〈村〉のあり様はまさしく共産的な共同体であり、大津山の言葉を借りれば、「共生的」実験農園であったと見ることができるだろう。

暮らしは決して楽ではなかったのに、詩作など文筆にふけったり、絵をかいたり、芝居に打ち込んだり、総じて自由にそしてのんびりとやっていたのである。川島が自著に書くところによるとこんな案配だったのである。「義務労働は朝の鐘で始まり、夕の鐘で終ることになつてをり、その間に昼食と休憩の時間があるのでした。私達は働きながら考へることも出来ましたし、昼の休憩の時間には、神のやうに偉大な人達の呼吸がどんなものであつたかを、蓄音機から出る音響から感じて、結ぼれやすい心情の自由をとき放す喜びも味へるのでした。本もよみ、小説をかき、絵を描きたいものはそれもしました。・・・」（『日向の村の思い出』一五三頁）。先生［武者小路］は彼らに古代からルネッサンス時代、現代までの彫刻や絵画の美しい複製写真を自由に見せてくれたという。これは〈新しき村〉は理念が先行して人工的に創設された、他の一般の村とは決定的に違うところであり、現実よりは理想が優先しがちな武者小路流のやり方の結果であった。生活は苦しいのであるから、普通なら皆一生懸命に、ほとんどガツガツと働かねばならないところであるが、全体として見るならかなりのんびりとしたやり方だったのである。元々トルストイに感化され自己の理想の実現、社会正義を貫かんとして始めた事業であり、取り組みにあたっての武者小路の気持ちは次のようなものだったのである。「自分たちは農夫にならうと云ふのではない。人類の思召に吐ふ生活をする為に先づ農夫から始めようと云ふのだ。自分達は真の生活を求める求道者だ。又真の生活を体験出来るだけ体験し、その説教をしようとする僧侶だ」（「自分達は」一八・六・七、小学館全集第四巻四〇頁）。ここにはとても農作業をやる心構えは感じとれないであろう。従って、一応額に汗して働くことにはなっているが、ムキになって働く必要はないということなのだ。だから、武者小路自身は彼なりに真剣であったが、はたからは道楽仕事のようにも見えたのである。専業の農家

が懸命に働いていい暮らしができなかったのである。彼らの仕事ぶりの農業で食えるわけがなかったのである。しかし、端からどのように見えようと、武者小路の〈村〉についての意図が真摯なものであったことは疑いを挟む余地はない。

初めの頃の一日のスケジュールは次のような具合であった。すなわち、食事の当番に当たった者は朝五時に起き、用意をし、その他の人々は六時に起床して、食事をし、七時には畑に行った。昼飯は一一時にとり、午後二時半におやつが出た。夕食の後は自由時間で、読書などをして過ごし、もう一〇時には消灯になったようである。食事は麦四米六の割の飯を常食とし、その食費は一人一日二〇銭位、一月一人六、七円ほどであったという。

仕事は原則的には計画と規則に基づいて行われていた。農作業は共同であったが、その他の仕事、雑用の類いは分業にして係りを決めてあたり、食事の仕度は当番を決めて交替で行った。だが、肝心の農業経営があまりうまく行かなかったのである。そもそも入植者の中でわずかに農業経験のあった者は川島ただひとりで、耕作ということではあとは素人集団であったのだ。彼は福島の会津の出身で、家出同然のごとく実家に妻子を残して我孫子の武者小路の家に居候をしていて、〈新しき村〉建設の運動に参加することになったのだった。しかしその彼もまもなく〈村〉では別の仕事に従事して殆ど農事らしいことはしなくなっている。当然のごとく、初めの頃を中心に農作業は楽ではなかった。皆疲れて九時半頃には寝たという。武者小路自身も鍬をもって耕したが、「どうも見当がつかないし、思ふやうにゆかない内につかれる。働くのは楽なものではない」（小学館全集第四巻五九五頁）という状態であり、耕すのは自分が一番下手という感想であった。殆どは素人ばかりなので、開村から数年立ってからは、地元の篤農家である津江市作が指導にあたり、いろいろ教えてもらったという。全体としては彼らなりに一生懸命働いたとみなせると思うが、それでも十分なものではなかったとみなければならないであろう。武者小路自身、畑は草だらけで作物の出来は悪いし、真面目な人もいるが、畑に出ている人は二三人切りだ、という状態だと書いてもいるのである（「新しき村にて（対

話）」第二三巻三四〇頁）。

しかし、もともと経済的に現実的な計画と綿密な計算の上に取りかかったわけではなく、理念が優先して誕生した事業であり、〈村〉建設から二年目早くも〈村〉の財政は苦しいものになっているのである。〈村〉の一カ月の生活費が五百円以上かかるのに、収入は三百円しかなかったのである。それに臨時費も五百円以上も要る（「今の村の経済」小学館全集第四巻二三四頁）。武者小路は建設から二、三年後が一番苦しかったと述べている。その時分不足分は武者小路の我孫子の家を処分した金をつぎ込み、さらには印税や原稿料と村外会員などの寄付で埋め合わせられていたのである。四年後の二二年には〈村〉の営みもある程度軌道に乗り、その頃の手記では、村の生活は第二種会員の寄付と村人の収入でまかなわれている、と彼は語っている（「新しき村について」第五巻四〇〇、四〇一頁）。

〈村〉の自活のために第一に不可欠の主食米の生産について言えば、〈村〉の土地では開村から一〇年間は最初からそれを諦めなければならない状態だったのである。伊藤の調査によれば、水田は大正一四年約一反五畝（陸稲三反四畝）、昭和二年三反五畝―秋二反五畝開田、着工から七年後の昭和三年にようやく水路が完成し、水田植付け面積一町歩（前年二倍）になり籾六〇俵を収穫したという(19)。〈村〉の人口は大正一四年に最高の五〇人位になるが、その後は大正一五年四一人、昭和三年三〇人、四年二五人、九年二〇人と、次第に減少して行った。つまりそれによって昭和三年以降ようやく生活の目処が立つようになったのである。伊藤は〈新しき村〉の『村史』に基づく数字として、昭和四年の稲作面積一町九反五畝、籾一一〇俵、五年の稲作一町八反五畝、籾一五〇俵、昭和六年籾一二〇俵で、その昭和六年になり、飯米だけなら自給の目処がついたように書いている(19)。もっとも、大津山の指摘によれば、これでもまだ自活は無理で、昭和九年にようやく村民二〇人、水田一町五反となり、主食の自給自足が可能になったとしている(20)。つまり、〈村〉が産み出す農作物を含めた収入では生活は成り立たず、その諸経費の多くは、前述のごとく、その大半を占める武者小路自身の著述による収入、村外会員やその他からの寄付金によってかろうじて維持されてい

たのであった。実際、武者小路自身がつぎ込んだ私財は相当の金額にのぼると思われる。

かくして村外会員の援助なしには〈新しき村〉の存立は不可能であったわけだが、その彼らがどんな気持ちで〈村〉を支援していたのであろうか。援助に積極的な会員から消極的な会員まで様々であったと思われるが、積極的な人たちの意見を紹介しておくことにしたい。〈新しき村〉の構想段階から積極的に参画し、雑誌『新しき村』の発行を終始支援していた木村荘五（のちに評論家となる）は、その信条に従えば村入りするのが妥当な人物であるが、家庭の事情などのために〈村〉には住まなかった。彼は〈村〉の構想が発表されて間もない七月に、自分は〈村〉の思想にも建設の趣旨に全く賛成であり、「新しき村の仕事を助ける事は当然の自分の仕事だ」と考えるのであるが、家族があるので入村できないということをこう述べていた。「（前略）だが、自分として、家族を持つ自分として物質上の生活の上から社会で働かなければならない自分として、其の故を以て、村の外にあつて兄弟達を助けるといふ事は正しい事だらうか。けれども家族を挙げて村に働くといふ事は今不可能である。自分の社会的報酬に衣食する弟妹や家族は今自分の手から離れる事が出来ない。今の自分としては外に道はない。村の外にあつて之を助けるといふ事は本当の正しい事ではない。然し今は止むを得ない苦い事実なのだ。自分のみでなく此の苦い事実に悩む多くの兄弟が其処には屹度ある」（『新しき村』大正七年九月号九九頁）。木村は大正一二年には〈新しき村〉出版部曠野社に一家をあげて入社しているし、その活動ぶりからしても、〈村〉運営に関しては例外的に理解があり積極的な方であったとは思うが、それにしても事業への帰依さ加減といい、ひたむきな気持ちといい、武者小路を鼓舞し、彼が村外会員は援助するのは当たり前と考えたのも分かるような気がする次第である。

〈村〉の運営がうまく行かなかった主な理由として、第一に選んだ土地が農業にあまり向いていなかったこと、第二に資金不足であったこと、第三に農業経験が乏しかったこと（わずかな例外を除いて農業には素人集団であった）、第四に人間関係が難しかしかったこと、などがあった。昨日まで他人であった人々が〈村〉の中で急に〝兄弟姉妹〟

になることは困難であった。内部にはたえず対立のようなものがあったらしい。特に開村半年後の内紛は実篤自身も巻き込んで相当大きな対立であった。事の発端は、実篤の東京出張中に、妻房子が金使いが荒く、しかも独断でそうすることなどに対して、一部の人たちが反発したためであったという。しかし、その根底には〈村〉をどう運営するかをめぐって、なるべく早く農耕での自立を目指すいわば農業重視派と、それに対して労働はほどほどにして自由時間の使い方や、芸術文化活動などに重きをおくいわば芸術重視派の争いであり、つまり、村の根幹にかかわる深刻な対立であったという。例えば、前者が仕事を重視して労働時間を一〇時間に延長すべきであると主張したのに対して、後者は逆に六時間に短縮することを主張するという風であったのだ。武者小路はどちらかというと後者の側に立ち、村外会員の寄付金に支えられていようとも、〈村〉はすぐにでも理想的な生活をすればよいといった態度であったという[21]。結局この内部対立のために、この時木村荘太ら一〇人位が村を出ることになったのであった。この頃入村した千家が一〇日ほどで逃げ出したのはこのいざこざにびっくりしたからであったという。この時〈村〉は崩壊の危機にさらされたのであった。

大方の予想の通り、〈新しき村〉の運営は当然計画通りに行かず、住民の多くは立ち去って行った。武者小路自身も大正一四年末に村を立ち去った。彼の離村後、特に昭和に入ると、上記のように村民は減少の一途をたどり、昭和九年には二〇人になる。この時期にはもう社会の〈村〉への関心は低くなったのであるが、大津山の調べによれば、この年の村外会員は七〇〇人前後にのぼっていたという[22]。しかし、不運にも昭和一四年発電所のダム建設のために、日向の〈新しき村〉の最良の水田を含む一町歩の土地が水没することになったのである。それにもかかわらず、武者小路たちは〈新しき村〉を解散することなく、埼玉県の毛呂山町に土地一町八畝を購入し、〈東の村〉で再出発することにしたのである。当時〈村〉には二〇人の村民がいたが、日向に二家族が残り、毛呂山に二家族が移り、あとは望む所へ出て行くことになった。こうして〈新しき村〉は日向と毛呂山町に存続することになった。そして、毛呂山の

〈新しき村〉は戦後発展し、〈東の村〉となり、今なお活動を続けているのである。

武者小路自身は〈新しき村〉で大正七年から一四年末まで七年余過ごし、その年一二月の下旬に離村し晦日か、たぶん年初めに奈良に入った。〈村〉では前妻の房子と別れ、一一年に〈村〉の住民である飯河安子と再婚し(婚姻届は昭和四年)、〈村〉で二人の子供をもうけ、その後彼女との間に三番目の子供ももうけた。そして、立ち去ってからも村外会員・第二種会員として終生過ごすことになる。

〈新しき村〉の運動に関してはさまざまの困難やしくじりにもかかわらず、武者小路は驚くほどの忍耐を発揮し、〈村〉の生活が始まってからなどは、自分は今までのような引き目を感じたりに良心の前にたえず言い訳をしないですむようになり、「粗衣粗食し、荷車をひっぱっても自分を人類の愛児だと云ふ幸福」感を味わうことができた、と語るほどであった(小学館全集第四巻五九七頁)。もちろん〈村〉が財政危機に陥ったり、内紛で存立があやうくなったときなどはそのような気持ちであったとは思えないが、総じて、彼は不平不満を言うことはあまりなく、そして、〈新しき村〉の運動についてはつねに失敗であったとは言わず、よくやっていると語っていたのである。

とはいえ、世間的には彼らの〈新しき村〉は一般には失敗であったと思われているであろう。〈村〉建設と運営が武者小路の計画通りには進まず、組織者自身も立ち去り、当初願った後続の〈村〉の出現もなかったという点では、つまり、所期の目的を達せられなかったという意味では失敗であった言わねばならないであろう。しかし、諸々の困難にもかかわらず、〈村〉が二〇年以上も続いたということ、主なきあとも〈村〉が存続し、かつ第二の〈村〉が建設され、現在なお存続しているという事実を見るなら、成功とは言えなくても、失敗とも言えないのではないかと思う。当初の目的は十分には達せられなかったが、かなりの成果を上げたと見ることもできるのである。

上野満は〈村〉のことをこう回顧している。〈新しき村〉は「正に浮き世離れした、恐らく世界じゅうどこにもない別世界でした。・・・私にとってはこの日向の新しき村の生活が、どんなに勉強になったかわからないくらいで、私の

その後今日にいたるまでの四十五年の人生は、この二か年足らずの日向の新しき村の生活が決定したといっても過言ではないと思うくらいです」(23)。

やはり二年余〈村〉に住んだことのある清水準蔵はのちに〈新しき村〉での体験を小説『山影』に描いているが、その中で〈村〉は「どこか駆け込み寺に似たところがある」(24)と書いている。即ち、駆け落ちをした人たちが逃げ込んで来たり、家出人が集まって来たり、病弱で働けない人たちを受け入れたりし、それらの人々を暖かく迎え、世話をしたのである。〈村〉はつまり慈善団体のような存在でもあったのだ。それは天国ではなかったが、実篤が最初意図したように、いくぶんかは人助けをしていたのであった。

〈新しき村〉に希望に燃えて入村したが、失望してそこを出る人が多かったわけだが、上野のように、〈村〉での生活が貴重な体験になり、それをその後の人生に生かして、大いに社会的活動にはげんだ人が少なくなかったのである(25)。

現在は〈新しき村〉の中心は埼玉県毛呂山町に移され、財団法人〈新しき村〉によって経営され、九州の方も〈日向新しき村〉として存続している。本稿では前者のみを研究対象とし後者は取り上げなかった。平成一〇年、作家関川夏央が日向の〈新しき村〉をテーマにした作品を雑誌に連載したが、この仕事が終了後『朝日新聞』にその〈村〉の過去と現在のことを書いている(26)。それによれば、〈日向新しき村〉は杉山正雄・房子夫婦が残ってやっていたが、今は松田省吾夫妻ともう一家族が住み、水田一・五ヘクタールで、年約四トンの収穫をあげ、自然食品店に卸しているという。武者小路らが惚れ込んだその景観は昔のままであるが、〈村〉の在り方は非常に変化したわけである。開村八〇周年記念にいわば大正理想主義の史跡として実篤の旧居などを保存しようとしているという。埼玉の〈村〉には現在約三〇人が住み、養鶏業を中心にして自活し、機関誌『新しき村』を発行している。それを講読する両方の村外会員は全国に七百人いるとのこと。

19 〈新しき村〉批判をめぐって

武者小路たちの〈新しき村〉構想に関しては、志賀直哉や長与善郎など彼に近い人たちからは賛同の声が聞かれたし、一般からもかなり熱烈な支持が寄せられたが、全体的にはやはりその空想性などを批判する声の方が多かったであろう。ここでは〈新しき村〉について当時のそのような批判を中心にして、どんな批判が寄せられたのかを見て行きたいと思う。

武者小路らの〈新しき村〉構想におそらく最も本格的な批判を加えたのは堺利彦であったであろう。具体的に〈村〉の建設地の選定をしていることについては、最初五月二〇日の『読売新聞』と『時事新報』で報じられたが、前者にはすでに同時に堺のそれに対する批判的なコメントが添えられていた。彼は更に『中央公論』に「〈新しき村〉の批評」を寄稿し、科学的社会主義者の立場から次のように批判していた。〈新しき村〉は空想社会主義者カベーや、オーエン、サン・シモン等が試みた見本的な共産村と同じようなもので、結局はそれらと同じように失敗の運命にあると彼は見る。彼らの試みはなぜ失敗したのか。「・・・なぜ失敗に帰したか、社会の変遷は必然的進化の径路である。其の進化の趨勢と理法とを見究めずに、道徳的、若しくば宗教的、若しくば芸術的に、或エライ人の頭の中から編みだした考案に依つて、其通りに社会を作り直さうとするのは無理である。・・・現社会を支配する経済力から免れる事はどうしても出来ない。然るに彼等はその経済力、社会力の根本には手を触れずに、ソツト其の支配を免れようとするのだから駄目である」（大正七年六月号四五頁）。引用文の前段はさておき（資本主義から社会主義への移行の法則性）、後段は僻遠地の〈新しき村〉といえども既存の経済力・社会制度の支配外に立つことはありえないと批判し、挫折の必然性を語っていた。もっとも彼は、武者小路らの計画は、徳富蘆花の「田園的別荘」や加藤一夫の「飯事的農業」に比べると、「同じくトルストイの影響を受けてゐながら」（四三頁）、それらよりやや規模が大きく真剣らしいの

で、無益ではないとも述べていた。しかし、彼は基本的にはそれは「アナクロニズム」であり、賛成できない（四七、四八頁）、というものであった。〈新しき村〉建設は、武者小路たちの否定にもかかわらず、世間からはトルストイ主義の実行、社会政治的にはその無抵抗主義的な行動と捉えられたのである。

雑誌『新日本』の反応も早く、この年の七月号に〈新しき村〉についての論文「文芸家の理想村」が掲載された。その署名には「無名氏」とあったが、それは山川均の筆になるものであることが分かっている。山川は堺と同じようにこの構想の非現実性夢想性を批判していた。彼は世界における〈新しき村〉の試みの諸例を堺よりも詳しく紹介し、それらと対比しつつ論を進め、そのような中では、個人の自由と少数意見を尊重する点で、武者小路の〈村〉はフーリエの共産村に似ていると指摘していた(27)。

武者小路はこのような批判に対して、具体的には堺の批判に対してだが、創刊号の『新しき村』で応えているけれども（「堺枯川氏の評を見て一寸」四二、四三頁）、それはかなり感情的なものであった。堺はやってみる価値はあるようなことを語っているが、全体的にはそれは空想的でアナクロニズムであり、やる前から失敗は不可避であるという意見なので、その反応は仕方のないところであったかもしれない。しかしあまり論理的な反駁はなし得ずに、ただ十年後二十年後を見てほしいと言うのがせいぜいであったのである。当時の水準では堺の批判は的を射てはいたけれども、しかし翻ってみるに、彼が依拠したマルクス主義が自らを〝科学的〟と称したほど科学的であったかどうかは疑わしいところでもあろう。二〇世紀後半それが裏付けられなかったことは歴史が示すところではないかと思う。

数年後に大杉栄も〈新しき村〉について論文「武者小路実篤氏と新しき村の事業」(28)を執筆し、批判を試みている。大杉はこの論文執筆の五、六年前に文壇の中で一番望みをかけていたのは武者小路であったと語り、それは氏が正直でいっこくなので、思想を行為まで持って行くだろうと思ったからだと述べている。しかし、その期待が見事に外れた、「氏は民衆の声を斥け、人類の思し召しに背いて、その正直といっこくとをカイザルに売ってしまった」からだと

いう。氏は共労共産の相互扶助的制度を主張し、その段階では民衆と一緒だが、どうやったらそのような新しい社会を来たらせるかという段になると、民衆から離れて行き、人類の思し召しから遠ざかって行くと述べていた。

自らもトルストイアンとして百姓を実践し、それを堺に「飯事的農業」とひにくられた加藤一夫は、武者小路たちの計画に当初から大きな関心を寄せていたが、しかし開村から半年も立たないうちに批判的になっていた。彼は万人兄弟主義を唱えながら、自分たちだけで孤立的な生活を営むのは、その精神に悖る、トルストイの教えを奉じた人たちのコロニーは失敗に終わったし、トルストイ自身もそのようなコロニーを是認していなかったことを語り、トルストイが主張した如く、結局貧富や社会的害悪を生じせしめる根本を打破する必要があるのだということを述べていた(29)。

加藤は更に〈村〉建設から二年余を経て、かなり本格的に武者小路を論じ、〈村〉批判を行った。論文は検閲でかなり伏せ字にされた形で掲載されたが、それでも主旨はつかむことができる。加藤は、武者小路らは社会の不合理を痛感して合理的な理想郷を建設し、それを全世界にひろめようとしているが、「・・・けれど単にかうした道徳的感化だけで、世界がよく理想郷化されるであらうか」(『新小説』大正一〇年三月号、五一頁)と、根本的な疑念を提示していた。「〈先づ、汝の土地を十分に耕せ〉と云つて居るが、これは今日の小作人や労働者の真の生活状態を知らない云ひ分だと思ふ。今日に於ける最大急務は、かゝる説教をする事ではない。土地を万人の自由なる使用に任す事である」(五一頁)。それ故彼はこの計画に意義がないわけではないが、賛同しかねる、と結論づけるのである。もっとも、加藤は先輩トルストイアンとして武者小路を大いに評価してこう述べている。「・・・武者小路君の力は偉大である。私はかつて、日本に於いて真にトルストイアンと呼ばれるものは武者小路君一人であると云つた事があるが、武者小路君自身も自分はトルストイの蒔いたものを刈つて居るのだと云つて居る。そして事実武者小路君の思想も宗教も生活も全然トルストイの志したものと同じだと云つていゝ。(武者小路君に於いては勿論武者小路式独創にはなつて居る

が）そしてその感化の力もトルストイと共に偉大なるものがあるに相違ない。・・・」（五二頁）。このように加藤は武者小路の〈村〉の事業をトルストイ主義的なものと捉え、自分は「最早絶対無抵抗主義」に執着することはできないという立場から、武者小路の行動を、社会改革を革命や暴力を避けて「無抵抗的、道徳的、宗教的感化によつてのみ達せらるべき」ものだとする行き方だとして批判したのである。

武者小路の〈新しき村〉構想について最も深く理解し、真面目な意見を述べてくれたのは友人の有島武郎であった。彼は『中央公論』に「武者小路兄へ」を寄稿したのである。彼はその中で、矛盾だらけの現行の経済・社会制度の変革を提示できるのは、未来を直覚する芸術家以外にないという見地から、武者小路の試みと勇気を評価し、他方で、それは失敗に終わるだろうと語ったのだった。「然し率直に云はして下さい。私はあなたの企てが如何に綿密に思慮され実行されても失敗に終ると思ふものです。失敗に終るのが当然だと思ふものです。・・・」(30)。しかしながら、このような企てはこれまですべて失敗に終わっており、失敗は普通の意味での失敗と言えないという。「要するに失敗にせよ成功にせよあなた方の企ては成功です。それが来るべき新しい時代の礎になる事に於ては同じです」(30)というのであった。つまり、失敗するであろうが、というより、むしろ失敗した方がいいが、未来を先取りしたこの種の試みは失敗でも成功でも、大局的に見れば成功であるという見方であった。

武者小路は友人有島の忠告ではあるが、これにもかなり感情的な反応を示し、『白樺』誌上で、そう言われたからといって、自分の確信がちょっとでも動揺すると思っているのなら、「自惚れすぎてゐる」といった主旨の反論を下したのであった。たしかにむしろ失敗した方がよいというのは友人らしくない助言であり、聞き捨てにはできなかったであろう。それに彼にはそのような心の余裕もなかったのかもしれない。上述のように有島の発言を冷静に分析すれば、彼の企てを評価しているところもあるし、友人らしく失敗しても予め慰めるようなことも語っているのである。武者小路自身は、失敗しても成功してみせるといった主旨のことを述べているが、そのような彼の想いはある意味ではこ

の有島の意見に通じるところがあったのではなかろうか。しかし人生の大事にのぞんでのこの時には、武者小路は少なくとも友人たちからは励ましの言葉がほしかったに違いなかったのだ。

有島はこの評論の最後に、「未来を御約束するのは無稽かも知れませんが、私もある機会の到来と共に、あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てようと思つてゐます。而して存分に失敗しようと思つてゐます」(31)、と付け加えていた。言うまでもなく、彼はこれによってこの四年後にひかえた自己の農場解放の計画を暗示していたわけである。しかも、武者小路の企てと同様にその失敗まで見越してである。武者小路としては何を考えているのかという気持ちになったとしてもおかしくないわけである。

武者小路の共生農園〈新しき村〉が当時の社会主義者たちやプロレタリア派から厳しい批判を浴びたのは止む得なかった。マルクス・レーニン主義の信奉者やロシア革命等の暴力革命肯定派から見れば、それは現実離れした全くのユートピア、〈旦那衆〉・ブルジョアのたわごとに見えたことは致し方ないところである。たぶん、武者小路たちの現実離れしていて、しかもずさんな計画ややり方を見るなら、その批判はかなりの程度当たっていたと言わざるを得ないであろう。それに堺、山川等などの科学的社会主義を信奉する者にしてみれば、武者小路らの〈新しき村〉は同じように社会主義的で、一見内容的に自分らの目指すものに近いだけに、かえって自分らの運動に結果的に有害になると受け止められたのだと思われる。そしてまた、闘いぬきにして共産的理想郷が建設できるのであれば、彼らの立つ瀬がなかったからである。

そして事実、武者小路にはかなり見込み違いがあった。やり方のまずさもあった。しかしながら、それをもってこの運動のすべてを、批判はいいとしても、否定しさることができるであろうか。実はロシアではトルストイが暴力革命よりも精神的な更正や自己完成、愛と理性による行動（流血によらない平和的解決方法）を訴えたとき、ツァー政府には民衆と労働階級への譲歩と彼らには非暴力による行動を訴えたとき、左派から同じ様な批判を浴びたのである

(32)。ロシアにおける支配階級と民衆・労働階級の厳しい対立を見るとき、トルストイの呼びかけも非現実的であり、荒唐無稽に見えた。だからといってトルストイの行動がすべて無益であったわけではない。それに耳を傾ける層が存在したのだし、そしてそれは最後的に対立する両階層の激突を阻止できなかったとはいえ、少なくとも心ある支配層により民衆と労働階級に目を向けるのに役立ったのである。堺は武者小路のやり方はトルストイと同じで、非現実的、無抵抗的であると語っていたが、それはロシアの左派のトルストイ批判と符合していたのである。

臼井吉見は『現代日本文学史』の中で、「〈新しき村〉については、世をあげての批判と冷笑と、一部の共感とが、武者小路という、ほがら顔の騎士に注がれたのであった」(33)と紹介し、しかし、それは「人類の夢」であり、そのひたむきな精神はいかなる批判によっても消し去ることはできないし、それが失敗であったにしても、「夢の切実さを笑うことはできない」と述べている。総じて一般には〈新しき村〉は失敗であったと見られているであろう。しかしながら、武者小路の〈新しき村〉運動は、彼が所期の目的を達せられずに、途中で村を去ったという意味では挫折で失敗であるが、それが彼が村外に去ったあとも存続し、今なお継続しているという意味では、彼の素志が死なず生き続けているのであり、ある程度成功したとも言えるわけである。彼は公には〈新しき村〉が失敗だったとは殆ど言っていなかったと思う。反省するようなことは語ってはいたが。それ故筆者も、それは〈成功〉とは言えないものの、全く無益であったとか、荒唐無稽であったとは思わない。それは支配層には、物質的目的だけにとらわれず、搾取者と被搾取者のない共同体も有り得ること、貴賤にかかわりなく皆が働き、共同で対立せず平和に生活することができることを示し得たし、働く階層には書物の上だけでなく皆が働く平等の社会というのも存在可能であることを印象づけえた思う。そして、ロシア革命のような暴力と流血にたよらないでも社会の変革は可能かもしれないということを。その意味でそれは存在意義があったと考える。それだけのことを示すためだけにしては、武者小路自身にとっても参加者にとっても代価は高すぎたのではないかという意見はあるであろう。しかし、やってみなければ分からない以上、

やはり武者小路にすればやってみるほかなかったのであるまいか。

20 〈新しき村〉の思想

〈新しき村〉建設には武者小路の主要思想がこめられ、彼の生き方のすべてが投じられていた。そして、彼のその思想には当初単なる彼の思想という枠を越えて、かなり宗教的な意味が込められていたと見たい。

武者小路は〈新しき村〉建設から一年半位たった一九二〇年三月、この共同体についての綱領的な論文「自分の人生観――新しき村の目的」の中にこう書いている。「・・・人間は自然の一部である。自然以外のものではない。このことを否定することは誰も出来まい。・・・／次に我等は人類の一員である、人間である、それ以外ではない。・・・」（「自分の人生観（新しき村の目的）」小学館全集第四巻六四頁）。大津山は武者小路はトルストイ心酔時代の後、その影響下から逃れる意味もあって〈自然〉傾倒に向かい、さらに〈人類〉傾倒に向かったと述べているが、その規定に従へばこの時期はその〈人類〉時代に属している。たしかにこの頃彼が書いたものの中には〈人類〉という概念が上位を占めていて、それがしばしば強調され、頻繁に出てくる。しかし、もともとトルストイ自身の思想の中でも〈自然〉とか〈人類〉は重要な意味をもっており、筆者は武者小路の〈自然〉傾倒も〈人類〉傾倒も部分的にはその影響にも与っていたと考えられるので、これをもってトルストイ離反とは見なせないのではないかと思っている。〈新しき村〉それ自体がトルストイの影響下に生まれたものであり、右の発言も大枠ではその範囲内のことと考える次第である。

武者小路は〈人類〉という言葉を、この言葉が通常用いられる以上に特別な意味を込めて使っている。彼はそれにもっと〈内面的〉な意味を込めて用いているのだ。彼はまた〈父なる人類〉という言い方もしているが（小学館全集

第四巻五九八頁)、〈人類〉という概念をほとんど〈神〉という概念に置き換えているように見られるのである。一九一八年一二月執筆の手紙の中の次のような説明はそれを示していよう。「・・・爾のうちに神ありと云ふ言葉が真であるやうに、或はそれ以上に爾のうちに人類ありと云ふのが本当と思ひます。個人のうちに人類的本能がなければ正義の観念とか、善悪の観念とか、内をかへり見て疚しくない時の平和さなぞと云ふものは感じられないと思ひます。・・・」(五九七頁)。われわれの善悪の判断は〈人類的本能〉、人類の意志に由来していると考えて彼はこうも言う。「・・・どんなに遠くにゐる人でも、どんなに昔に生きた人でも、その人の立派な点にふれるとよろこびを感じることが出来るのは人類的本能によると思ふのです。・・・それで人類的本能を生かし切る時、個人はいづれの国の人の心をも感動させ、清くし、喜びを与へ得ると思ふのです。・・・人類的本能を少しでももつてゐる人は、人類的本能を生かし切つた人類の愛児に感動しないわけにはゆきません。この事実を君は何処からくると思ひます。自分はそれは人類の意志からくると思ふのです。個人の深い処を動かしてゐる、万人共通のもの、それを自分は神と言ふよりはもつと現実的な言葉である人類と言ふ言葉をもつて顕はすのが一番真に近いと思ふのです。・・・(後略)」(「手紙三つ」小学館全集第四巻五九七頁)。この手紙の中では、彼はそのような人類の意志を感じとり、それを敬い、それを邪魔せずに、それに従って生きる必要があるということを説いているが、それを実現する場こそほかでもなく〈新しき村〉だったのである。

〈新しき村〉建設にあたって武者小路はそこに第一種、第二種の二種の会員を想定し、前者は直接村に住む会員、後者は村外にあって村を支援する会員であるとしていた。その第二種の会員について村建設の少し前の一九一八年六月に彼はこう述べている。「・・・自分はこの二種の会員が出来、そしてお互に意志疎通し、そして熱心が益々加はりさへすれば、新しき村は必然に生長しなければならない。宗教の起るか倒れるかは熱心の信者を得るか得ないかにある。第二種の会員を信者と云い切るのは少し語弊があるかも知れない。しかし新しき村の栄えるか衰ふるかは、この

第二種の会員を得るか得ないかできまる。・・・「新しき村」の第二種の会員になることが人類の思召に吐ふことだと云ふ信仰を持つてくれる人のみを第二種の会員と認める。今のどの宗教によりも、どの神社仏閣によりも、どの宗教家によりも、新しき村に喜捨する方が人類の御利益をうけることが出来、後世の為にもなる（本当の信神心から出た）ことを信じられる人のみ第二種の会員と認める。・・・／・・二種の会員がます〳〵ふえ、そして益々熱心になつてくれることを祈る。そしてそのことが神の思召に吐ふことを信じられる間、自分はどんなことがあつても力をおとし切りにはならない。この信仰が自分達の立つ基礎にならなければならない。・・・」（「二種の会員」第四巻四〇頁）。

この文章の中の言葉遣い・用語は〈新しき村〉思想がいかに宗教色をおびていたかを証明しているであろう。この書き方だけを見るなら、それはさながら新興宗教集団のようにも見えるのである。一九二〇年九月執筆の一文「新しき村の信仰」の中では次のようにそのことはいっそう明瞭に現れている。

新しき村の信仰は何処にあるか。

一言で云えば、人類の真心を通して顕はれる力を信仰することである。

（中略）

人類の真心に従つて生きる。人類の真心、自己の内にある真心によって生きる。それに背かずに生きる、其処に安住と、何ものも恐れぬ力を感ずる。

そのものこそ、真に新しき村の信仰をもつものである。この信仰を本当に持たぬものには迷ひがある。新しき村の精神はわからない。この信仰を強くもつものは巌の上に家を建てる人間である。嵐にあっても崩れない（第四巻八〇頁）。

〈人類の真心〉というのは非常に抽象的な表現で何を意味しているのかもう一つ明かではない。ただ真心というものについては武者小路は「たゞ人間の内にある、人類の内にある、神のあらはれである真心を信じれるものゝみ」（八

一頁)、落ち着いて新しき村の精神に従って生きてゆくことができると語っている。文脈から推論するに、真心とは人間の良き面であり、善であり愛であり、かつそれは神の現れとも言えるのである。そして、それは単に目指すべき目標といったものではなく、信ずべきもの、信仰の対象でもあるのである。武者小路は「神と云うものを何となく認めてゐるが、それは「真理」となづけられても「生の力」と云われても少しも困らない。ただ生きてゐるよろこびを本当に感じさしてくれるものが、殊にありがたい感じを起さしてくれるものがこの世にあることを知り、それが神の如き感じを与えてくれるものがあることを知っている。それは「愛」と云ってもいゝであらう。「美」と云ってもいゝであらう」と語っている(「新しき村について」第五巻三九九頁)。ここにもまたわれわれはトルストイの神観との類似性を見ることができるであろう。

トルストイはご承知のごとく、聖書の中ではキリストの説いた「山上の垂訓」を最重要視し、教会の説くキリスト教観とはかなり異なる神観を唱え、三位一体や、聖霊、原罪説、死後の復活、来世の生などを否定した。その宗教観はきわめて現世的であることを特徴とし、今世こそ人間の生きる世界であり、そこで「山上の垂訓」などキリストの教えに従って生きることこそ、永生(永遠の生)につながるとした。キリストの教えによれば、彼の説いた戒律の中に表現されている神意を実行するという条件下においてのみ、個人の生活は滅びることなく、人類の子の中で不動に永遠のものとなり、永生が実現することになる、すなわち、全人類の現在・過去・未来と結びついている普遍的生活、つまり人類の子の生活に連なることになるのである(34)。そして、彼は、神は永遠で無限である、あるいはその属性を愛、霊魂・心、真理、善、生、自由などと、様々に説明したのである(35)。武者小路の説いたものの中に独自性を認めはするが、しかし筆者は内容的にはトルストイの宗教観に限りなく近いものを感じ取っている。

一九二〇年頃の作と思われる詩「神と人間」の中では武者小路はこう語っている。「神は人間か、／人間以外のものか、／神は人間から生まれたもの／万人の真心から生まれたもの／神を見た人間は云う。／俺は死んでもいい。」(36)。こ

の詩は当時の武者小路の宗教観をよく現わしているように思う。神は万人の真心に存しているものなのである。その意味ではそれは〈人類〉と呼びかえてもいいわけである。彼はまたエッセー「神の国」（二一・三）の中ではこう書いている。「神の国は心霊上のものである。しかし幽霊の国であつてはならない。・・・／神の国は地上のものであり得る。しかしそれは神の国の住民たる資格の出来たものゝ心霊の上に築かれる。／神の国とその義しきを求めるものゝうちに先ず神の国はあらはれる」（第四巻一四三頁）。かくして地上の神の国、新しき村の建設となったわけである。このようにして〈自然〉が神として肯定され、また〈人類〉が真心の所有者とされるのである。そして、〈新しき村〉について語るこの頃の武者小路の口吻は宗教家のそれ、聖職者のそれであり、ここに見るように、村の内容もすぐれて非常に理想的で、それは浮き世離れした理想郷、まさに彼が述べていた通りに実現しておれば、地上における神の国であったのである。その意味では〈新しき村〉の運動は一種の宗教的な運動であったと見ることができるのである。この頃の彼は相当程度宗教に傾いていたと見ていいであろう。

いずれにしろ、〈新しき村〉建設にあたっては当然のごとく非常に高い目標、高尚な目的が掲げられていたのである。彼は新しき村は「協力」と「独立」の村であり、「各自の自我を生かすことゝ、お互い協力することゝ、この二つがうまく調和される処に、新しき村は生れる」と説明する（「新しき村について」小学館全集第五巻三九八、三九九頁）。

一九二三年七月執筆の「理想的社会」では次のように述べている。

「理想的社会に於てはすべての人が労働のわけまへを果すことによつて、すべての人が自由な時間を少しでも多く獲得することが必要である。

・・・他人を働かせて、自分だけ自由をたのしめる社会は理想的な社会ではない。理想的な社会は皆が何かの形で皆のために働き、そしてその社会の人が一人のこらず衣食住の心配はなく、又病気の時の心配なく、子供や、齢とつた時の心配なくくらしてゆけるやうにし、その上で自由をたのしまうと云ふのだ。自分だけ自由をたのしめばいゝと

云ふのではない」（小学館全集第四巻一二八頁）。武者小路の〈新しき村〉は皆が働き皆が協力し合う共同社会であるが、その構成員には最大限の自由が保証されねばならない。もっとも、各人はその社会にふさわしく、トルストイ張りの〈自己完成〉がこう求められるのである。「人は義務労働を果すことにより、生活の保証を得、そして安心して自由の時間を生かすことによって、自己の完成を心がける」（第四巻一三五頁）。それについては、「自分は自分を次第に教育してゆきたい。又訓練し、鍛へてゆきたい。自分を完成したい。自分は自分の欠点をよく知ってゐる。自分は怠け者で、気がよわくつて、癇癪持で、好嫌が劇しくつて、嫉妬が強い。それらのものをなるべく生かしたく思ふ」（「自己を生かした者」一九二二年七月脱稿、第四巻二一六頁）とも語っている。〈村〉建設から四〇年後にも、「真理とは何ぞ。僕にとって真理は、自分も生き、他人も生き、全部も生き、人間としての完成を目指してこつこつと働く事である」[37]と、自己完成について述べている。もっとも、若い頃の彼の特徴は、単なる自己完成に満足しないで、それが社会改造と結ぶつくと思っていたことである。「社会の改造より先づ自己の改造と云ふ人がある」が、それは本当である。しかし、「自己を改造しながら、今迄の儘の社会にそのまゝ住めるものではない。自己を本当に改造したものは、周囲との生活関係を自づと改造するものである。・・・（中略）／真の自己改造家は周囲を自づと改造するものである」（「社会改造と自己の改造、其他」一九二〇年一〇月脱稿、小学館全集第四巻二四八頁）、こう彼は語るのである。この辺が〈新しく村〉的運動に批判的消極的であったトルストイと、むしろそれを実践した武者小路との違いなのである。

武者小路の〈新しき村〉についての諸信条は、共同労働やそれに土地の私有にも反対する（第四巻一三六頁）など、表面的には断るまでもなく社会主義者の主張にかなり近く、本人もそれを「自分達は社会主義者の理想と同一の理想を持つてゐると思ふ」（「理想的社会」一三二頁）そう認めている。しかし、個々の人間の個性を最大限尊重しかつその自由を最大限に保証しようという主張などの点では、それは社会主義の行き方とは決定的に違っていた。それに武

者小路は社会主義には同情的であるが、暴力革命には決定的に反対であったのだ。社会主義と似ているが、「たゞその目的に向ふ道がちがう。自分達は何処までも他人の意志と、生命を尊敬し内から働らく。・・・性急な外からの破壊には全然賛成出来ない。それは虫のいゝ空想である」（一三二頁）、こう彼は主張するのである。

このように彼の主張は社会主義に非常に近かったが、しかし各人の個性や自由を第一に考える点などは後者のそれとは決定的に異質であったのである。その点ではこの頃の武者小路はトルストイとは違い社会主義に共感的ではあったが、しかし、その師父と同様に本質的に社会主義の主張とは相い容れなかったのである。そもそも彼は「すべてが共産であると云ふことは人間の自然性に反してゐると思ふ」（「理想的社会」一二七頁）のであった。同じようなことを彼は繰り返し述べている。「自分は社会が同一色になることをよろこばない。統一は必要であらう。しかし個人々々は自己の生れたまゝに出来るだけ立派に生きなければならない。さもなければ、人間が個人々々につくられた面白味が生きない」（一三五頁）。「自分は生きることには平等で、個性を生かすことには自由でなければならない。之は否定出来ない事実である。・・・／理想的社会では両方が生きなければならないのである。平等の基礎の上に個人の自由が立つのである。個人の自由と云ふことは平等である。だがその自由の生かし方は種々さま〴〵なのがいゝのである」（一三七頁）。

これらを見ると〈新しき村〉の思想は社会主義及び共産主義思想に非常に近く、武者小路もそれらの部分的な近似性は認めるけれども、基本的には後者との類似性を否定するのである。彼は社会主義・共産主義と異なって、「新しき村」は「経済問題を解決するのが目的ではない。第一の目的は人間らしく生きると云ふ点にある。真心を生かすと云ふ処にある、正しい生活をもとめる処にある、パンの問題はその解決に従つて自づととける一つの問題にすぎない」（「新しき村と他の主義」（一九二〇年九月三日）『新しき村に就ての感想』第二三巻三二一～三二七頁）、と述べている。だから、それは共産主義というより「協力主義」と言うべきであり、それは人々が兄弟姉妹のように暮らす所で

あり、四海同胞主義なのである。そして、彼は後者が拠り所ないしは容認する革命や暴力、強制といったものを繰り返して否定するのである。彼は「社会主義は唯物的に人を救はうと云ふので強制的だ。自分達は他人に強制されることは喜ばない」と言うのである（三二七頁）。その意味では、本人が述べ、かつ大津山も指摘しているように、〈新しき村〉は社会主義や共産主義ではなく、兄弟主義であり、共生主義なのであった(38)。

また、「理想的社会」（二三年七月）の中で理想的社会たる〈新しき村〉の目指すべき姿について述べ、次の三つの要件を備えているべきだとしている。その一は、「すべての人が、人力で得られる限りにおいて長生きするやうに十分注意されてゐること」、その二は、「各個人が、出来るだけ自己の趣味、自己の正しき要求、天職、個性を発揮出来るやうに注意されてゐること」。その三は、「すべての人が出来るだけ多くの喜びを感じて生きられるやうに注意されてゐること」であった（小学館全集第四巻一二三頁）。だが、そのような生活を保証するために、そして衣食住を確保するために、「義務労働」が必要であるとし、それが適材適所で行われる必要があること、それをなるたけ少なくして、各人が自由な時間を出来るだけ多くもつようにすることなどが必要であるとしている。彼は「以上の点に於ては自分達は社会主義者の理想と同一の理想を持つてゐると思ふ」と語る。「たゞその目的に向ふ道がちがう。自分達は何処までも他人の意志と、生命を尊敬し内から働らく。内から生長に伴ふ破壊は恐れないが、性急な外からの破壊には全然賛成出来ない」（一三二頁）とも語るのである。一九二三年頃にはロシアは社会主義のソビエトに体制を一新し、全面的な変革に乗りだし、旧ロシア社会の全的な破壊を始め、その破壊的本質を露にしていた。武者小路は社会主義の中に自己の理念との類似性を見ていたが、それ以上にこの頃には差異の大きいことも的確に見てとるようになっていたと思われる。

〈新しき村〉建設は前述のように武者小路が自己の内で十年以上も育み、高い使命感を抱いて取りかかった大きな事業であった。それは彼の内部にトルストイに感化されて胚胎したものではあったが、その実現は彼にとっては大き

な社会的あるいは〈人類的〉使命につき動かされた、それは文字通り彼の人生をかけた大事業であった。彼はしだいにそこに神命のようなものさえ感じとって行った。〈村〉建設三周年の際に「自分は新しき村の仕事が何かに守護されていると云う信仰を益々もつ様になった。・・・（中略）／自分はこの神の力を本当に感じている。・・・」[39]、こう彼は書いている。

〈新しき村〉を興すにあたっては武者小路には大きな夢と期待があった。やはりこれと同じ頃、つまり建設に乗り出して三年目に書かれた詩「我等は」にはそれが神の国にたとえられてこううたわれている。「我等は／神の国を建設するための／労働者、／雇はれたもの、／撰ばれたもの、／托されたもの、（中略）／自分を生かすことは／兄弟姉妹を生かすこと、／兄弟姉妹の／協力が微妙に生きる国／そして人類の意志と／神の意志をかしこんで／個人としても／兄弟姉妹としても／立派に生き、／愛と正義が／自由に生きる国／独立と協力の国／自他共に生きる国／神と人の生きる国／真心と自由の生きる国（後略）」（二一、九、二三）（小学館全集第五巻三七二、三頁）。

その少し前には、同調者のひとりの青年〝開発藤吉〟宛の手紙でこう述べている。「・・・我々が今宣伝するのには何が一番大事だ、と云ふと、矢張り、魂の問題と思ひます。神の国に住む資格のある人間をつくること、即ち、新しき世界がくるのに、道をつくつて待つ人々を生むことです。／他人の幸福をのぞむ心を生かし、それを生かすことの無意味でないことを示すことです。・・・」（小学館全集第五巻三五二、三頁）。ここには、他人の不幸の原因にならないこと、真心をいかし、人のため、他人の幸福のために生きること、すべての人が人間らしく生きるよう心がけることなどが語られている。

すなわち、武者小路の〈新しき村〉運動は、一方には自己の〝寄生的生活〟の清算という目的があったが、他方には理想的社会の建設、〝地上における神の国〟の建設という大きな目標があったのである。武者小路は理想主義的な人間であったが、非常に現実的な人間でもあった。彼は来世の〝神の国〟よりもこの世における〝神の国〟の到来、よ

りましな社会の建設を望んだのである。

「神の国は地上のものであり得る。しかしそれは神の国の住民たる資格の出来たものゝ心霊の上に築かれる。・・・／神の国は人間が住める世界でなければならない」（「神の国」第四巻一四三頁）。「自分の望む処は各個人が、人類の生命を尊敬すると同時に個人の生命を尊敬し、全体も部分も生きることである。そしてそれは各個人の正しき自覚、人類と自己、他の個人と自己の関係をはつきり会得し、他人を生かす道で自己を生かすことである」（「人類愛について」第四巻一六五頁）。「・・・人類や神の意志に吐ふものは遂には勝利を得ることを信じ、その道を歩かうとするものは、神と人類の愛を、そして兄弟姉妹の愛を受けとることを信じ、神の国の地上に建設されることを望み、又祈らう」。もしわれわれが一致して真心を生かすことが出来れば、大きな事業が実現可能である。神の国を地上につくることは出来る、こう彼は主張するのであった（「諸兄姉」第四巻一七九、一八〇頁）。このような時の武者小路の話は聖職者の説教を思わせるものがあったのである。

来世にではなく、現世に〈神の国〉の建設を求めるというのはきわめてトルストイ的であると言わねばならない。しかしトルストイは〈神の国〉をきわめて精神的なものと理解しかつ説いていたが、武者小路はそれをより現実的なもの物質的なものとして捉えて、直接〈地上における神の国〉の建設を試みたのであった。

そして彼は〈新しき村〉の事業を単に自分のためのみならず、人類のために必要であるという強い信念に基づいて遂行していた。「自分は現今の思想界、運動に、新しい第三のものを加える。我等は資本主義では勿論ない。軍国主義でも勿論ない。社会主義でも、無政府主義でも、虚無主義でもない。・・・（中略）／・・・自分達は建設主義者の名によって立とうと云うのである。天下の思想界の大半を我等の手に奪いとろうと云うのである。そして平和に、手に血をぬらさずにこの世に立派な新しき世界をつくり出す道を世界に示そうと云うのである」(40)。つまり彼には、〈新しき村〉によって、資本主義でも社会主義でもない第三の道を世に提起したいという強い意欲もあったのである。

武者小路らの〈新しき村〉構想は理念が先行して生まれた具体性に乏しく非現実的な、独り善がりなものであり、その行き詰まりはたしかに始まる前から予測できた。しかしそれはこの世ではすべてが〈金〉や〈物〉によって支配されてはならないこと、人々が自由で精神的なものを第一に考えて生きる社会もありうるだろうこと、また、労働の尊さ自ら鍬をもつことの重大さを身をもって学ばせ、それによって人間的な、精神的な成長の機会を与えうることなどを示しえたように思う。そして、トルストイズムは世界中にひろまり、ロシアにおいてばかりではなく、世界の各地にそれを実践すべくコロニー建設が起こっていたが、武者小路の〈新しき村〉運動はその流れの一環と見ることができるのである。もっとも、前述の通り、トルストイ自身はその種のコロニー建設というものを嫌っていたのではあった。

21 〈村〉のその他のトルストイアンたち

〈新しき村〉建設の時期の武者小路は、既に考察したように、研究者たちによって、総じて、トルストイの影響下から脱却していたと見られがちなのであるが、筆者はこの時期までには武者小路流（武者主義）になっているとはいえ、しかし大枠で見ればまだトルストイの影響下にあったという観点から論を進めてきた。もっとも武者小路自身は、このことに関して、〈新しき村〉建設に着手したとき、新聞に誤って、大抵はトルストイアンである〈白樺〉同人たちが日光の山中に、日本のヤースナヤ・ポリャーナを建設して、トルストイ一流の自給自足的田園生活を営む計画を立てていると報じたとき、それに訂正記事を掲載させて、この計画は〈白樺〉とは関係がないし、「我々はトルストイアンではありません」、と断言していた(41)。しかしながら、筆者には、まさしく〈新しき村〉構想とその精神や思想はトルストイ的であると思われるし、武者小路の思想の深層にはトルストイズムがまだ息づいていたと思うので、上記の

ような考えを保持している次第である。

すでに見てきたように、〈新しき村〉はもともとかなり濃厚なトルストイズムの感化の下に構想されたのであったし、そこではトルストイの誕生日が、釈迦やロダンなどのもそうであったが、記念すべき日として祭日になっていたのである。とはいえ武者小路はその実現というよりは、〈人類〉全体の理想実現ためにという願いを先頭にたてて、〈村〉建設と運営にあたっていることをしばしば語っていたし、事実この時期トルストイへの言及はそれほど多くはなかった。それでも、大正一二年三・四合併号に彼はこんな詩を残している。「トルストイの言葉（題）　／トルストイの言葉をよむと／実に同感の時が多い。／トルストイのまいた種が、／マルクスのまいた種に、／勝つ時が来るであらう。／人間の生命を愛し、尊敬することを本当に知ることが／第一に必要である。（三・四号二頁）

そして雑誌『新しき村』には外国人としては、おそらくトルストイの名前が一番多く散見されるのである。創刊の七月号にはトルストイの名前はなく、翻訳掲載されているのもメーテルリンクのものであるが、次の八月号の一ページ目には、前述のようにトルストイの「改革の三手段」が木村荘太の訳で掲載されている。労働者救済の手段として、第一に、自分のために直接間接に他人を働かせないこと、他人の労働を必要とするような奢侈物を求めないこと、第二に、嫌な仕事を自分のためには無論のこと、他人のためにも進んでやること、第三に、労働を軽減する方法―機械や蒸気や電気を発明すること、これら三つがあるが、現在人々が応用しているのは第三の手段のみで、第一と第二の手段は敬遠して用いることを欲しない、それ故に人間の「道徳的な革命」内的な「更生」が必要であるとする、これはトルストイの論の紹介なのである。これはトルストイがつね日頃説いていることではあった。原典が何であるかを記されていないのではっきりしたことは言えないが、内容的には『現代の奴隷制』に書かれているものに近く、その辺からの抜文ではないかと思われる。

さらに、本誌の同じ号にトルストイのヘンリー・ジョージ宛の書簡「トルストイのヘンリー・ジョージの説の宣伝

者に与へた手紙」が、市橋善之助の翻訳で掲載されている。トルストイはヘンリーの主張を説明しつつ宛名人の質問に答え、為政者たちは奴隷制度を擁護したのと同じように偽宗教や偽科学を動員してそれが不正でないことを弁護したが、彼らはそれを援用しつつ土地私有も不正でないと主張している、「そこ（土地）で働らかないでゐて、数百千の貧しい家族がそれらを使ふ事を妨げてゐる人々に依つて、土地が専ら支配される事は、奴隷を所有した事と同じやうに明らかにいけない、さうして、恥づ可き事である事は今日のあらゆる教育ある人々には明かであらうと人は考へる。・・・」（八月号一六頁）と語り、それなのに宗教はこのような所有形態を祝福し、経済学は人類の利益になると主張している、と述べている。これに関しては、モードの編訳書トルストイの『論文と手紙』の第一章「ヘンリー・ジョージに就いての手紙」の部分訳であることを断っている。

トルストイ物に関しては、その他、一〇月号に「理性と愛」（市橋訳）、一一月号に「〈無為〉（トルストイ）から」（市橋訳）、一二月号に「分業（トルストイ）」（「社会的害悪と其の救済」より、木村荘五訳）、一〇年一二月号に武者小路自身がトルストイの「女と女の価値に就て」を訳載している。最後のものはトルストイがチェーホフの作品の序文として書いた文に感心して、一五、六年前に翻訳したものだという。女性の医師や、学者、詩人等などもいいが、母や、女性の助手や友達や慰籍?者や、そして、男の有する最も良きものを愛し、知らず知らず男のすべての美徳を発揮させる女性、かくのごとき女性がいなかったら、人生は全く悪くなるだろう、といった部分が見られる。武者小路の女性観がほの見えているのではあるまいか。そのほかに、大正一〇年五月号に「悔ひたる罪人」（木村荘五訳）、一九二三年（六巻）一〇月号にチェルトコフ著「トルストイの手記」（上田秋夫訳）等が翻訳掲載されている。

その他に、永島直昭が雑感の中で一頁弱の次のような「トルストイに就いて」という一文を書いている。「・・・我等がトルストイの大きさに触れ、彼を限りなく尊敬する理由は、理屈なしに彼が偉大であり、より善きより完き生活をするために彼の全生涯を賭したといふ点にある。本当に捨身になつて善のため真実のために働いたといふ点にあ

る。・・・トルストイはトルストイ流になした。我等は我等流になさう。トルストイは彼の兄弟主義実行のためにその全財産を投棄しようとしたかも知れないが我等は、乞食や酔漢にたゞで与へる金があればそれをもつと有益な我等の仕事のために使うであらう。我等の仕事が、トルストイによつて及び彼の仕事によつて刺激され勇気づけられることを自分は感謝してゐる」（一九一九年五月号二三頁）。永島は村入りはせず、村外会員として東京方面の纏め役をしていたのだが、〈村〉の行き方がトルストイズムそのものでなくても、その影響を受けたものであることをこのように認めているのである。

外山楢夫は「基督の教と新しき村」において、〈新しき村〉の精神はキリスト教の教えの具現化であるといった主張をしている。「・・・自分は新しき村の仕事こそ神の国を全部的に求めるのに最も適はしい道を示すものだと信ずる」。「神の国とは各人の愛が自由に生き得る世界でなくてはならない」が、正義と平等の社会を目指す〈新しき村〉は暴力や強制によらずに、「各人の愛と正義と自由意志」（一八、一九頁）とからそれを造り出そうしているからだと述べるのである。その際に外山は何度もトルストイを引き合いにするなど、彼のキリスト理解はトルストイのそれに沿ったものであることが分かるのである。「今自分が恩人とし、師として仰ぐ者が三人ある。日本の武者小路氏、ロシアのトルストイ、及び二千年前に出でてキリストと呼ばるゝナザレのイエスが即ちそれである」、こう彼は冒頭で語っている（五頁）。そして、その理由について彼はこう説明している。「・・・自分は懸命にイエスに近づかうとしたが、その努力は自分を彼の教会と自称する団体に赴かしめずして反つて、トルストイに赴かしめた。自分はトルストイによつて己の罪、すなはち己が今行つてゐる生活の不正をさとると同時に、人生の全き意義はたゞ神及び隣人を愛して之に仕ふるに在ることを教へられたのである。而して更に武者小路氏によつて新しき村とその理想とを知るに及んで、最も合理的な道でイエスやトルストイの精神を此世に生かすことの可能を悟らしめたのである」（六頁）。このように、実際武者小路の〈新しき村〉は、宗教的な見地、特にキリスト教の見地、とりわけトルストイ的キリスト教の見地か

らの方が理解しやすかったに違いなかったのだ。

外山は三高のドイツ語の先生で、京都の下鴨に住んでいて、専門はドイツ文学であった。だがここに見られるように、トルストイによって精神的に覚醒され傾倒したかなり熱心なトルストイアンであったと思われる。非常に真面目な人で、周りの人々から好かれ、尊敬されていたという。その外山が、昭和三年ドイツに留学中に、七月に肋膜で倒れ、九月にドイツの入院先のフライブルグ病院で永眠した。下村歳男がその外山について、自分が感化をうけた大恩人であり、彼が「人格者だと云ふ事は皆の人が同感だろうと思う」と語り、そして彼は「人格修養の手本」であったと述べている(42)。外山はドイツ文学者なのに、トルストイのものをよく翻訳するなど相当傾倒していたことが窺えるのである。

次に、そのほかの〈新しき村〉の村内会員と村外会員とトルストイとの関係を見ておきたい。

永見健一は『新しき村』大正七年一二月号にかなり長いエッセー「〈村〉の兄弟と逢ふ前後」を寄稿している。それを読むなら永見はその前後は一種のトルストイアンであったろうと思われるのである。彼は当時はまだ学生であったが武者小路の『新しき村の生活』を読んで感激し、「其著述の動機と内容の必然さを感じ其主張の正しさを感じ其企画の勝利を確信し」、そして「自分は村に這入つて新らしいエルサレムの建設にあづかる幸福のわけまへを是非得たいと左様思つた」(一二月号一七頁)。彼は弟を連れて〈村〉の生活に入りたいと考えたのである。しかし、故郷の家族、両親と弟妹たちのことを思うと、自分の大学卒業と助けを待っている弟妹たちを思うと、とても自分勝手も行動はできないという結論を下さざるを得なかったのである。

永見は実はその少し前にトルストイの『我等なにを為すべきか』を読み、征服されたのである。彼は少し前からトルストイに親しんでいたという。そして、夏休みにたぶん出版されて間もない加藤一夫訳のこの本に遭遇したのである。読み返してみて、トルストイの結論は「動かし難き根本の法則」である、二〇世紀の科学が何と言おうと、「それ

等と独立な全然真理であるとより他に考へやうがない」という確信を抱くに至る。「偶然か必然か、運命は自分にトルストイの彼の書を送つた。而して自分の頭は彼の書を精読するに最都合よく凡そ用意よく備へられてあつた。かくて自分は彼の書を読んだ。而して興奮した。有難がつた。泣いた。自分の過去を耻づかしく思つた。穴があれば這入りたく思つた。枝葉の末で文句を強ひてつけてもなにしろ全体の論の進め方には一言の不服もなかつた。而してわけても其結論に就いては其正当なのに唯おそれ入る許りであつた。／・・・かくて朧げながら自分の胸に畫かれた彼の姿は最早永久にきゆる時はないであらう。なぜもつと早く読まなかつたのだらう。・・・自分の時と頭の許しとを得てなるべく早く彼をもつと色々読みたいと思ふ」（七年一二月号一六頁）。何という深い感動であろう！　永見は『我等なにを為すべきか』には「新しい洗礼を受けた気さへした」（二二頁）と語っているのである。そしてこの後で武者小路の本を読み、〈村〉への憧れを倍増させたのである。

木村荘五もほとんどトルストイアンと見なしてもいいのではないかと思われるほどトルストイに入れ込み、言及しかつ問題にしている。彼は大正一一年に、ボンダレフの著書に寄せたトルストイの序論について詳細に検討・紹介した本格的な論文を四回（「ボンダレフと人間生活の第一原理」「パン労働の原理」各二回ずつ、大正一一年二月、四月、七月、九月号）にわたり、掲載している。トルストイの労働観を論じるのがその狙いであった。ボンダレフの根本思想は、聖書にある如く、額に汗して汝のパンを稼ぐべしであり、パン労働はすべての人の義務であり、それを回避して自然な生活を離れているがために失っている理性を人に回復させる、つまり、パン労働は人類を救う妙薬であるということである。トルストイはそれに同感を示し（七月号七、一〇頁等）、それのみならず、さらに積極的に、人間の幸福は個人的な幸福にあるのではなくて、神と人とに仕えることに見いだされること、神を愛し、己の如く隣人を愛することこそ、キリスト教の教えの真髄であると主張したと木村は論じている（九月号九～一三頁等）。彼は総じて、トルストイは深くて大きい、「人間の母である大地の脈動が彼を通じて自分に最も強く響く、深い命、つきない泉！」

であるとしている（大正一一年二月号五頁）。

木村は大正一二年一月号には「ロシヤの土地の問題」を掲載している。アメリカの新聞の報道に基づき、革命を興したソビエト政権が土地の社会化を宣言したがうまく行かなかったために、土地の個人使用と事実上の所有権を認め、その結果農民が農民に借地するなど、従前のようになり、その農民政策は失敗したと紹介している。

前述のごとく、＜村＞建設二年目の大正八年四月に武者小路の誘いで一時＜村＞入りした千家元麿は内紛に驚いて一〇日ほどで＜村＞から逃げ帰ったが、それからも殆ど終生村外会員であった。その彼も二〇代を中心にトルストイを非常によく読み、傾倒しており、一時的にはトルストイアンであったかそれに近かったのではないかと想像されるのである。彼も雑誌『大調和』の昭和三年九月のトルストイ生誕記念号に「トルストイ小感」を寄稿しているが、その中に、トルストイのものは殆ど全部読み、ショーペンハウエルやロスーなどと共に、「崇拝熱が最も激しく」「トルストイは青年時代の神、活きた偶像であつた」（一三頁）、彼のものはいつ読んでも大きな感激を受けると述べている。千家はさらにこう書いている。「・・・彼［トルストイ］は深淵である。窺へば窺ふ程深くてその片鱗も容易につかれ得ない。・・・私は文句なしにトルストイが好きだ。芸術家としても偉大であつたが人としても恐ろしく偉かつた彼のやうな人間は、自分の足り無いところを豊かに持つて吾々が到達し難い理想を彼の中に実現した人間であるから、吾々が創造し得ないものを、創造してくれた神に近い人間であるから、自分は彼を賛美し、彼が空間に実現した新しい不朽の創造を礼拝するのだ。・・・」（一四頁）。彼はトルストイをキリストや釈迦や孔子やソクラテスと同列に置く。それ故彼にはトルストイはやさしい＜人類の慈父＞のように思うのだが、他方では恐ろしく映るのである。彼はトルストイは自己の罪をつねに深く反省する人として「天才の中で最もいたましく最も優しく、最も弱かつた」（一五頁）と捉えるのであった。千家はトルストイをその文学の高さ、その技巧の卓越さ、女性の描き方の素晴らしさのゆえに高く評価した。のちに彼は一時精神病院に入っていたとのことであるが、そのトルストイ受容はこの詩人らしく非常に

繊細なことを特徴としていたのであった。

〈新しき村〉の村外会員を経て大正末から〈村〉の住人として数年を過ごした農民作家清水準蔵（韮山圭介）も、若い時強烈なトルストイの〝洗礼〟を受けていた。彼はそれ以前に武者小路の著作を読み漁り、強い感銘を受け、村外会員になったのだが、それだけでは満足できずに、家出をして〈村〉に走ったのであった。彼はドストエフスキーやツルゲーネフなどのロシア文学に引かれ、翻訳や英訳で手当たりしだいに読み、しぜんトルストイの物も読むようになったいた。そして「トルストイという為体（えたい）の知れない大きさに呆れ」るまでになっていた。そして、この作家の宗教的な諸著作を読み進むうちにますます強く影響を受けるようになって行ったのである。

彼［謙吉―清水］はトルストイの『芸術論』とか『わが宗教』とか思想的な著作も読みはじめていた。それは少しずつ彼の中に何かの変革を与えていたに違いないが、『われら何を為すべきか』という一冊を読み終った時は、謙吉はトルストイの眼光の外へは一歩も出られないところに坐りこんでいる自分に気がついた。まるで虎の爪の下におさえつけられた鼠か小兎が、この大王様の鋭い眼の外へは絶対に逃げ出せないと観念したような恰好なのだ。謙吉はそれ以前から、『新約』はよく読んでいたが、基督教の権化のようなトルストイの談じ込みは彼の首根っ子をつかみあげて「分ったか、分らぬか」と詰問し、「分った」と言わぬうちは絶対に手は放さぬぞと言わんばかりののっぴきならぬ談じ込みのように思われた。／謙吉は、親に養われて学校へ通っている自分の生活を肯定しているわけでもなかった。外套を着ないでいる人間がいる限り、外套を着て歩くことにも彼の気持ちはこだわった。大学を出ることも、社会生活の中に惰性的に身を処するための方便としか思えなかった(43)。

このように清水の〈村〉入りの直接的な要因は武者小路への心酔であったが、その背景にはトルストイの強い感化が存在していたのである。彼は〈村〉で夜ホイットマンの詩集の翻訳に没入することによって、ようやく次第にトルストイの束縛から解放されて行くように感じるのだった。

かくして彼らの多くは直接トルストイと向かい合い、あるいは武者小路の中にトルストイを、日本のトルストイを見ていたと思われるのである。それはトルストイそのものではなく、武者流儀・武者主義ではあったが、その深層にはトルストイズムがあったし、あるいはその何割かはトルストイズムと見なしてよかったと思う。

このように村内会員の中にも、村外会員の中にもトルストイアンかそれに近い人たちが何割かは存在したと想定されるし、少なくてもトルストイズムに共鳴していた人たちはかなり存在していたと想定されるのである。そして、世間的にも、新聞の誤報が示すように、主宰者武者小路の否定にもかかわらず、〈新しき村〉はトルストイアンの集まりか、トルストイズム実践の場と見られがちだったのである。

ちなみに、雑誌『新しき村』が閉刊されてから、東京で武者小路らによって発行されていた雑誌『大調和』は一九二八年九月号を「トルストイ生誕百年記念号」と題して刊行され、大勢の人たちが執筆しているが、〈村〉関係の人について言えば、武者小路の「トルストイ雑感」「三段雑誌」に、その他、千家元麿の「トルストイに関して」、永見七郎の「トルストイの一面」、木村荘五の「トルストイの戯曲論」などが掲載されている。

昭和四年に武者小路は、小寺謙吉なる人がイギリスの南イングランドのホウィト・ウエー・コロニーを訪問し、書いた論に触発されて、「英国に於けるトルストイ主義者の村と新しき村」（小学館全集第九巻六一三頁）を執筆している。それは約三〇年ほど前に建設されたトルストイアンの村で、戸数三〇余戸、村民百二三十人くらいだったという。純然たるトルストイ主義を実行するために建設されたのだが、その後変化なしにはすまなかったという。土地が貧弱なために生活の糧は農業以外のところに求められ、そこには二つの木工と皮革の工場があった。そして村人は菜食主義者であったが、後者の工場では当然皮革を加工して生活の糧を稼ぐという矛盾ぶりだったのである。規律がゆるいところなど多くの面でかなり武者小路らの〈新しき村〉と類似していたらしい。武者小路はこれを読んで、たぶん同じくトルストイズムから出発しても、〈村〉の運営の仕方はさまざまあってよく、その窮屈なイズムにあまり捕らわれ

ないで、そこに住む人々の思う通りに生活を組み立てればいいのだということを感じとった、つまり、自分らの〈村〉のあり方を肯定することになったと思われるのである。

22　武者小路の人道主義

武者小路と言えば、人道主義的作家というイメージがある。すでに述べたようにかなり極端な個人主義や利己主義を説いていた武者小路は大正期、〈新しき村〉建設の時期には非常に大きな思想的な転換が起こり、隣人愛や人類愛を説くようになる。武者小路のいわゆる人道主義はこの頃に形成され、もっとも明確に発現したと言えるであろう。一九二二年執筆の「隣人愛に就て」の中で、武者小路は、自分たちの一生は他の多くの人々の一生と切り離して考えることはできない、われわれは独立して自分のことだけを考え、他人のことを少しも思わなくても、安穏と暮らせるようには造られていないという。「我々はさういふ風に造られてゐないのです。我々が何のために造られてゐるかは知りませんが、とにかく我々といふ人間は、一個の人間に造られてゐないで、多くの人間につくられてゐます。各人が何かもつと大きなものゝために生きてゐられるやうに造られてゐると自分は思ふのです」（小学館全集第四巻一六八頁）。つまり、人間はひとりではなく、集団として存在するように造られているということなのである。個人を非常に大事に考える武者小路ではあるが、彼は人間の原存在は集団的であることを認めるようになっているのである。

われわれ個々人は小さく、脆い存在であり、個人としてほとんど存在できないような脆弱なものであり、人類という集団としてようやく存在可能なのである。「・・・そしてその人が人間の生命を愛して行き、他人の不幸に対して同情したり、それを自分のことのやうに感じたことを聞くときに、我々の心は自然に喜ぶやうに出来てゐます」（一六八頁）。「・・・我々の生命といふものを、こんなに儚く、こんなに脆くつくつて、それで満足してゐる筈がないのです。

実際我々を造つたものは個人々々を主にして造つてゐるのではない。人類を主にして造つてゐるのだと思ひます」（一六九頁）。人間というものは自分の生命だけに執着せずに、兄弟姉妹や他人の生命を同じように愛して生きて行くように造られている、そういう生き方をしている人を見ると喜びを感じるように出来ているという。

同じく二二年執筆の「人類愛について」においても、武者小路は個人の生よりも集団、全体の生を重視する考えを唱道している。もっとも、その場合、全体の中で個人の生が充足的であることが前提にはなる。「自分の望む処は各個人が、人類の生命を尊敬すると同時に個人の生命を尊敬し、全体も部分も生きることである。そしてそれは各個人の正しき自覚、人類と自己、他の個人と自己の関係をはつきり会得し、他人を生かす道で自己を生かすことである…」（小学館全集第四巻一六五頁）。武者小路流に言うと、隣人を愛するということは自分を殺すということを意味しないのだ。同時に自分も生き、全体が生きることが必要なのだ。この辺がキリストの教えに基づき徹底した利他主義・人道主義を説いたトルストイと違うところであろうか。武者小路は自分の感情をあまり殺して他人と調和しようとすると、喜びを感じないように人間は出来ている、とあくまでも人間の自然な生き方を主張するのである。彼は自分の隣人愛というのは、「・・・各自に与へられた生命をそのまゝに尊重して、いびつにせず、我々を造つたものゝ意思が素直に生きるやうにして、同時に愛しないでゐられないやうな生かし方で自分を生かし、又兄弟姉妹を生かして、ある場合には兄弟姉妹の生命の方が価が尊かつたから、自分の生命を犠牲にすることによつて――自分が死ぬことによつて、尚生きる道を見出すことが出来るといふことです」（一七七頁）、こう語るのである。このように語るときの武者小路の見地は個人と集団あるいは社会のバランスがとれていて、極めて人道主義的であると言えるのではあるまいか。しかしてそのような武者小路は最もトルストイに近いと言えると思う。この見地こそほかでもなく〈新しき村〉の主思想でもあったと見ることができるであろう。

そして、武者小路は恵まれない人たちのために働く、他の人々のために働く必要性を強調し、そして人類愛を説く

のである。「自分は野心家や、無責任ものは愛さない。だが不幸な人、不合理に苦しめられてゐる人の為に本当に働き、それにセンチメンタルな同情で働かずに、人類の意志を知つて、人類の為に最も役立つ方法で、本当に働く人を尊敬する」。他方では、彼はこうも語る。「・・・全人類がたよることの出来る道徳律、死を肯定出来る宗教心の生かし方を会得することが必要である。それ等を不必要に思つてゐるものは、人類愛、人類の生長欲を感じてゐないものである。自分はそれ等の人に組することが出来ないのは、自分達の使命を知つてゐるからである。／自分達の内には人類的本能以外のものも多いが、人類的本能もちやんとある。／その本能を生かしてくれるものを愛するのを自分は人類愛と云ふ、そしてそれは又人類から愛される。それは同時に人類の為に役に立つ仕事だからである」（第四巻一六六頁）。

この頃の武者小路は盛んに隣人愛を説き人類愛を説いた。「我々が隣人を愛するといふことは、その隣人が自分と同じく神の子であり、或は神といふ言葉がはつきり呑み込めなければ、人類の一員であるといふことを知つて、人類を親と見、さうして我々を兄弟姉妹と同じく子供と見たならば、その時に人類を造つたものゝ意志がよく分つて、我々がお互に仲よく愛しあふといふ事が、我々をつくつたものゝ意志であるといふことがわかるだらうと思ひます。自分の子供達が仲よくすれば親の愛がおのづから感ぜられるといふことは自然であつて、親兄弟が仲悪くして我々が愛を感ずるといふことは出来ない。お互ひに許し合ひ、助け合つたときに、我々は喜びを感じます」（第四巻一七六頁）。このように彼は真の人道主義者として人の生きる道、隣人への愛を説いたのである。そこには聖職者の説教をほうふつとさせるようなところもあった。

人道主義はわが国ではすでに明治期にユーゴーやトルストイなどによってもたらされ(44)、それが大正期にはいっそう広くひろまることになったが、そこではトルストイが主導的な役割を演じていたことはほぼ常識となっているだろう。トルストイの文学や思想が、そして、彼の反戦的な諸論はみなその精神に貫かれており、彼が特に広まることになった大正前半を中心にわが国ではそれはひろまることになったと思っていいだろう。本多秋五は青山（山川）菊栄

の人道主義についての考えを評しながらこう述べている。「青山（山川）の分類は、人道主義とトルストイズムを一項目にくくつてゐるが、当時における人道主義の盛行は、実際またトルストイの流行と相携へてゐた。日本におけるヒューマニズムならぬ〈人道主義〉なる言葉そのものが、もともとトルストイの教説の輸入と結びついて行はれた言葉と考へられるのだが、なかんずく『白樺』派の人道主義はトルストイと因縁ふかいものであつた」(45)。おおむね白樺派全体がトルストイの人道主義の影響を受けたとみなされていると思うが、その白樺派人道主義の中心的な存在は武者小路であった。彼はトルストイのこの人道主義的思想と精神をすでにこの作家への心酔時代に吸収していたと思われる。もちろん、その頃いくぶんか傾倒した徳富蘆花や木下尚江や内村鑑三や、その他講読していたという幸徳秋水の『平民新聞』や伊藤証信の『無我愛』などからも吸収したかもしれないが、その多くはトルストイからであったと考えられるのである。それはその後彼の個人主義高揚の時期にも枯渇することなく、その心内で彼流の自前の人道主義に成長して行ったと思われるのである。

すでに見たように、この時期の武者小路は一般にはトルストイ離れをしたと思われているのであるが、それ故むしろ彼がトルストイに熱烈に心酔していた時期を含めて、この頃こそ彼は内容的にトルストイの思想とトルストイズムに最も近い所に存在していたと見ることもできるように考えられるのであるが、いかかがであろうか。

23　トルストイを生涯の師として生きる―結論にかえて

武者小路は明治の末から大正初めにかけて、トルストイに批判的になり、本人が語っている如く、メーテルリンクに追随しようとするようになったことは否めない。しかし、彼の生き方や書き残したものが内容的には必ずしもそうはなっていないというのが筆者の見方なのである。大津山は武者小路は明治四一年に「トルストイ離反を志向した」

と述べているが、「志向した」ということであるならばその通りであろう。しかし彼がそれでも絶えずトルストイに立ち返り問題にしていた事実を見るなら、それを「トルストイ卒業」とか「トルストイ脱却」とは言えないように思うのである。この頃武者小路はトルストイから一定の距離を置き、かなり極端な個人主義利己主義を唱えたのであるが、それが〈村〉建設の二、三年前から「人類愛」的なことを語るようになり、〈村〉時代とそれ以降しばらくはその見地を堅持している。このような観点からも人道主義作家と思われていた時期の武者小路が最もトルストイに近かったのである。つまり、かなりトルストイ離れをしていたと見られていた時期にも、その深層においてはトルストイ主義が残っていて、健在であったし、少なくともトルストイとの共通項が多く存在したのである。

武者小路は大正四年に自分に対するトルストイの影響についてこうも述べていた。「・・・自分は日本のいろ〳〵の人から感化を受けた。しかしそれを皆あはせてもトルストイから受けた感化には及ぶまい。自分はトルストイに加藤直士氏の訳した我宗教で先ず感動し、我懺悔、福音書解説(?)、神の国は汝曹の衷にあり、等で感化を受けた。文学的方面よりは宗教的方面で受けた復活やクロイチエルソナタにも随分感心した。否感心し切つた。新聞や雑誌を見て片仮名のトの字があると初恋の人が恋人の名を思ひがけなく見出した時のやうに赤面した。・・・」(「感心しない作品と」『小学館全集第三巻』四八三頁)。これは心酔時の一九、二〇の頃のことで、その頃はトルストイのことを悪く言う者がいると怒ったが、それから十年余立った今はそのような時半分も怒らないと語っている。とにかくトルストイ離れと言われるこの時期でも、武者小路はトルストイの悪口を耳にすると多少は腹が立ったのである。それ故、結局彼はトルストイに距離を置くようになった時期を含めて、殆ど終生にわたり何等かの程度その影響下にあったと見ることができるのでないかと思われるのである。

一九二八(昭和三)年九月はトルストイ生誕百周年にあたるので、武者小路たちは当時発行していたその雑誌『大調和』の九月号を「トルストイ生誕百周年記念号」とし、全編トルストイがらみの論を掲載した。武者小路自身は「ト

ルストイ雑感」「三段雑誌」などを寄稿している。そして、その中のたとえば「トルストイ雑感」の中に、改めて自分がどのようにトルストイを理解しているか、このロシア作家からどのような影響を受けたかを次のように述べていた。

「トルストイが小説家として世界の一流のなかでも一流に属してゐることは云ふ迄もないことゝ思ふ」、「僕はトルストイと云へば作家としてよりも人間としてすぐ頭に浮ぶ。この位い誠実な、真剣に、真正面に人生について苦しみ、それに正しい解決を与へやうと苦しんだ人はないと云つていゝ位いと思ふ。／老、病、死についてなやまされた点では仏陀に比較することが出来、その解決は耶蘇の教へに一致してゐる」、「トルストイに感心すべき点は沢山あるが、真理をまげない点もたしかに彼の特色である」（以上小学館全集第九巻五五六頁から引用）。

トルストイの人類愛について、「その本気さでは彼以上のものは古今東西になかつたと云ひたい程だ。その点にいつも自分は感動する。そんなにやかましく云はないでもよささうだと思ふ時はあるが、しかしトルストイが其処まで云はないではゐられない気持や、心づかいには感心する。／・・・そしてトルストイは実に人類の良心、又理性を代表するやうな男である。我等は云はれた通り生きられない時にしろ、又それ以上に生きられた時にしろ彼の声は軽蔑することは出来ない」（第九巻五五九頁）、「トルストイと云ふ一個の人間を通じて人間の本心が叫び出した。我等の本心は全部それに同感出来ない時でも、一個の人間の本心にふれる喜びだけは十分に味はふことが出来る。そしてトルストイの云ふことには嘘はないのである。我等の本心と共通なものから叫ばれた言葉が多い」（五六〇頁）――以上「トルストイ雑感」より。

「自分はトルストイによつて精神的洗礼をうけた。もつと露骨に云ふと、立ちなほるのに骨が折れた失恋の苦しみも、トルストイによつて霊的によびさまされることによつて救はれ、自分のなすべきことが多いことを知らされた」（五六一頁）――「三段雑記」より。

〈新しき村〉から離れてまもない昭和初めのこの時期、武者小路は他方では、今の自分はトルストイ風の人よりも

ホイットマン風の人を好んでいると告白しているのだが、それでもトルストイをこのように高く評価していたのである。彼がそれなのに若い時のように全身全霊をもってトルストイ心酔に没入できない所以は、前述のようにトルストイがあまりに〝肉〟を罪悪視しぎるという思いが彼にはあるからなのだ。えてして肉体を軽く見たり罪悪視する傾向が宗教家には多いが、「トルストイの教への精神にはまちがいがなくも、少し肉の否定がゆきすぎてゐる傾向を自分は認めないわけにゆかない」と彼は言う。霊を生かすものは救われるが肉を生かすものには救いはない。そうではあるが、人間には肉体があってこそ霊が存在する以上、そのどちらが欠けても人間の存在はあり得ないはずであり、肉を否定しすぎてはいけないのではないか。トルストイの教えがこの点で行きすぎているという武者小路の批判は、筆者にも了解できる。しかして、武者小路はこの点における「このごく少しの考へのちがいが、自分をトルストイアンにさせないのである」（「トルストイ雑感」第九巻五五七頁）と語るのである。右に見たように、他の殆どの点では彼はトルストイと同意見か同調できるのであるけれども、ただこの一点においてのみトルストイの考えと齟齬をきたす。であるがゆえにトルストイアンにはなれないという。武者小路の主張は尊重されねばならない。しかしながら、上述のようにその他の殆どの点で老翁の意見を受け入れ、そのようになるべく生きようと努力しているのであれば、一般的にはトルストイアンと見なされる、そして現に彼は他の多くの人にまさにそう捉えられていたのである。とはいえ、これはかなり原則的な問題に関してなので、彼にとっては「ごく少しの考へのちがい」とすませることができなかったのかもしれない。

そして、〈新しき村〉はトルストイアンの集まりではないという武者小路の主張にもかかわらず、〈村〉はどうやらロシアにおいてさえトルストイアンたちの集まりとして見られていたのである。雑誌『大調和』のあとを継いだ『独立人』掲載の一文「ロシアのトルストイアン」によれば、〈村〉はたぶん〝同志〟としてロシアのトルストイアンから手紙を受け取り、返事を書いたが、これはそれに対する武者小路自身の返書のようなものであった。その中で実篤は

その手紙を興奮して読み、彼らがトルストイ主義を本気で実行していることに感心し、かつ尊敬していることを述べ、そしてこう認めていた。「私達はあなた方からくらべるとずつと呑気な考を持つてゐて、トルストイから怒られるやうな点も多いと思ひます。私達はトルストイによつて随分教はりましたが、しかしトルストイアンにはなり切れなかつたのです。それで三つの点についてのおたづねを、皆あなた方の望んでゐられるやうな結果とはまるでちがつたことになることを丈気の毒に思つてゐます。私達は肉食も禁じてゐませんし、酒や煙草も禁じておりませんし、性の点も各自が責任をもち、他人に強いない範囲で各自に任せてあります。私達は特別な人間の集りではなく、誰でも入れ、又誰が入つてもこまらない社会をつくりたく思つてゐます。特別にトルストイアンでなければならないとは思つてゐません」（第九巻五九三頁から引用）。ここには武者小路がどうして自分をトルストイアンと見なさなかったのかという理由が示されていよう。たしかにトルストイズムとは菜食主義であり、酒やたばこをやらず、性的には一種の禁欲主義であると一般には見られていたので、武者小路の反応は当然であったかもしれない。しかし、この種のことの実行を守らないからトルストイアンでないということにはならないであろう。トルストイはこれらに近いことを実行したが、決してそれを一貫して実行していたわけではないし、他人に強いたり、喧伝したりすることもなかった。むしろ、武者小路が言うように自然に振る舞えばよかったのである。

昭和四年秋、武者小路はトルストイの末娘アレクサンドラ・トルスタヤと会っている。彼女はヤースナヤ・ポリャーナの管理運営にあたっていたが、ソ連共産党政権のやり方とことごとに対立するようになり、何度か拘束されたあと、亡命をすることにし、徳富蘆花や小西増太郎など何人か知人のいる日本へやってきたのだった。実篤が受けた印象は「顔も体つきもトルストイを実に思はせる。実に柔和なトルストイである。しかし実に気持ちのいゝ、しつかりした人だ」というもので、そして、「…今のロシヤにかう云ふ女の、トルストイアンが居てくれるのは実に気丈夫だ。…今のロシヤが余りに物質的な事、死刑をやりすぎる事、なぞもあつさりではあるが、確信をもつて反対してゐる事が

わかる。・・・」（小学館全集第九巻六四四、六四五頁）こうほめていた。娘から父親のトルストイを想像して、実際のトルストイはするどくもっと恐ろしいところがあったに違いないが、彼女から察すれば、トルストイも快活に話す気持ちのいい人だったに違いないと想像して、彼は愉快に思うのだった。

その長い生涯の間に武者小路はトルストイについていろいろ語っているが、彼のそのトルストイ評価は、結局のところ筆者には評伝『トルストイ』の中に集約されているように思う。日本におけるトルストイ受容について一連の優れた論文を発表しておられる柳富子は近著『トルストイと日本』の中で、武者小路はその著書『トルストイ』執筆の時点でも「・・・依然として、人間としてのトルストイ、トルストイの生きざまにより深く共感」(46)していたということを明らかにしているが、筆者もそれには全く同感である。その中で彼はこう書いている。「トルストイは人類の良心、理性、裁判官のやうな人です。トルストイのものをよむと自分が裸にされて、良心の前に立たされるやうな気がします。いくらいゝわけしても、そのいゝわけの力のないことを感じ、本当に自分はまちがつた生活をしてゐる、今の人類はまちがつた立場にたつてゐるどうにかしなければならないと云ふ気がします。そして心の底から反省を強ひられ、今迄平気で見すごしてゐたことを今更に真面目に考へなほさなければならないと云ふ気になります。この力では少くも文学をやる人でトルストイ以上の人は一人もゐないやうに思ひます」。「私はトルストイの最大の力は現代の人間の生活殊にその制度が虚偽であり、不正であり、恐るべきものであることを誰人にも無遠慮に正視させる点にあると思ひます」（一一頁）。「ともかく小説家としてのトルストイは少くも最大の一人です。之は誰も否定しない事実です」（一一頁）。しかし宗教家や論文家としてのトルストイは最も多く非難された。それでいて彼の内部にひめたる力は世界の人の心を動かしたのである。

いずれにしろ、これらの引用文は武者小路がトルストイからどれほど影響を受けていたかを、それがいかに深いものであったかを如実に証明しているであろう。武者小路はトルストイに出会えて良かったと思う。「ものゝ見方、考へ

方をより深かく、より正しく、より正直に、より人類的にしてくれた恩は忘れ」られないと思う。

トルストイから、特にそのその肖像から受けた印象については武者小路はこう書いている。「・・・たしかにトルストイの顔はトルストイの精神が一生かゝつてかたちづくつた芸術品だ。同じ感じを之以上に見る人に与へる顔は他にはあり得ないと思ふだろう。頭髪は後ろに波立つてゐる。眉毛は荆のやうで、その間にある深い皺は何か見るべからざるものを見た怒りと悲しみをあらはし、見つめたる目は涙ぐんでゐる。・・・この顔から出る言葉に権威がないはずはない。全精神の顕はれだ。不正を見た悲しみとどうにかしないではゐられない淋しさとに長年きたへられた貴き精神の顕はれだ。そして其処から出る言葉は予言者の言葉だ。不正と不合理にたいする警告だ。人類の運命を心から気にする処から出る警告だ。深い所に愛がある。しかしその言葉は聞く人の良心をさゝないではおかない。(中略)晩年のトルストイは涙のトルストイだ。自分はそれを限りなく貴しとするものだ。ありがたくも、勿体なくも思ふものだ。そしてそのトルストイの精神、その淋しさ、その真剣さ、その悲しみと、心配とから人類的愛を生み出して、それに一生をさゝげないでゐられなかつた精神が、トルストイの晩年の顔をかたちづくつたことを自然と思ひ、トルストイの晩年の肖像殊にその特色のよく生きてゐる時の肖像を貴しとするものだ」(「トルストイの肖像」小学館全集第三巻二三六頁)。武者小路は感激屋でよく本を読んでは涙し、そして物事に没我的に没頭しやすい方だったと思うが、本多はそのような実篤について、彼は一種の救済者意識をもち、鋭い感能力の持ち主で気持ちが高揚したときには相手を帰服させる感能力をもった、「一宗をおこす宗祖的素質をもつた人物」であると感じられると述べている(47)。筆者も、武者小路はトルストイと同じように多分に宗教者的説教者的な(あるいは予言者的な)気質を有したお方であったと考えている。

また、かつてトルストイによって目覚めさせられたことについて武者小路はこう述べている。「自分もトルストイによつて罪悪の恐ろしさに今更目ざまされた人間だ。『闇の力』を見て、誰か赤坊を殺すのを罪でないと云ふことが出来

よう」。そして、彼はトルストイを模範とし（原器のようにして）、その思想と生の原点として、その強弱に程度の差こそあれ、結局武者小路は終生彼によって生きていたと思われるのだ。「よし自分は自己をジャスチファイする為に又生かす為にトルストイに反抗する時があつても、トルストイの精神に愛と尊敬を持たないわけにはゆかない。殊に善にたいする涙ぐみたい程のトルストイの愛を自分は感じる時、今更にトルストイを賛美したくなる。・・・人間に愛想をつかしたくなる時、自分は数人の愛しないではゐられない天才のことを思ふ。トルストイは少くもその内の一人である」（四～五頁）。こうしてトルストイから一時的に離れてもまた戻り、トータルとしては彼はトルストイの影響の範囲圏かあるいはその周辺で生きていたと見ることができるように思うのである。

武者小路がトルストイの作品で一番感心させられたのは、芸術作品では『クロイツェル・ソナタ』、論文では『さらば、われら何をなすべきか』『神の国は爾のうちにあり』であった。これらの著作を読んでいると反抗心も起こってくる。「しかし彼のかいたものを段々読んでゆくと、（中略）感心しないではゐられない、反抗してゆく内に、涙ぐみたくなる、懺悔したくなる、自分の生活はなんと云つてもまちがつてゐないとは云へないと云ふ気になる。・・・トルストイがそう云ふのは尤もだ、その愛の前には跪づきたくなる。本当にさう云ふ気に人をさせる力をもつてゐる。その力は賛美すべきものだ。それは人の心を清め、ハンブルにする力を持つてゐる。」（『トルストイ研究』大正六年第二巻第七号六頁）。「少くも自分は自分の経験のみ語れば、自分はトルストイによつて人類的愛、人類の運命、個人の運命、悪の恐ろしさを知つた。・・・そして自分の生活の不正を知つた。そして自分を生かすことを知つた。（後略）」（「トルストイに就ていろ〳〵」（同号七頁）。

引用が多くなるが、筆者は武者小路がトルストイにいかに感化されたかを彼自身の言葉をもって示したいと思い、やむを得ずそうしている次第で、お許しいただきたいと思う。大正六年彼はさらにこう書いているのである。

「自分が時々トルストイがなつかしくなり、トルストイのことを想ふのは、彼の人類愛と、何処までもその愛を生

かさうとした点だ、否生かし方だと云つてもいゝ。トルストイは真正面から人類的本能を生かさうとした人だ。／そしてそれをさまたげるものと戦ふことを辞さなかつた。彼は人類の運命が恐ろしい道を歩いてゐることを心から感じた。どうかして人類を正しき道にひきもどしたいと思つた。（中略）／彼が煙草や酒や肉食をすら恐れたのは、それが人間の精神を殺伐にし、良心を魔睡し、肉欲を燃やすことを恐れすぎたからだ。その内に人類の運命を狂わす可き可能性を認めたからだ。／その点彼は予言者だ。たえず彼は人類の運命の恐ろしさや、不合理や、罪悪を数へ上げて、人々を反省させようとした。（中略）／我々はまだトルストイの精神を知らなすぎる。トルストイをいゝ加減に想像して、早くトルストイを自分勝手につくりあげて、それに反発を感じたり、非難をしてゐるやうな人が多いやうに思ふ。・・・しかしトルストイの精神を第一に見れば安価には反抗出来ないはずだとしか自分には思へない。トルストイを知る前と知つたあとゝ、その人の内面的の生活がかはらなかつたならばその人はトルストイの精神に本当にはふれなかつた人としか自分には思へない。自分は自分の信用してゐる自分の知つてゐる人の全部がトルストイを真によむと反省を強ひられ、生活内容がかはることを経験してゐる」（「人類的愛と現世的愛」小学館全集第三巻二三七、八頁。上と同じ文）。

これまで見てきたように、まさしく武者小路のトルストイへの思い入れはきりがないほど深く強かったのである。彼は兄の勧めなどもあり、一九〇六年五月『神の国は爾のうちにあり』の翻訳を試みてさえいたのである（第二二巻四〇頁）。『人生論』（昭和一二、三年）においては、子供の時から修業を勧め、自分が尊敬しないではいられない人を見いだし、「・・・寂しくつてまゐつてゐる時は、もつと苦しい谷をさまよつたドストエフスキーを。良心のするどさでは、トルストイを・・・」に範例をとるように語っている（第二四巻一三九頁）。

日本の文壇では大正以降トルストイよりもドストエフスキーの方がよく読まれ感化されて行き、その傾向をメレジコフスキーの有名な書『トルストイとドストエフスキー』がかなり側面から促進した。メレジコフスキーのこの本を

武者小路は翻訳が出て間もない、大正二年一月に読んでいる。「メレヂコウスキーの『トルストイとドストエウスキー』は中々面白い処がある。しかし如何にもメレヂコウスキーらしい見方だ。人間を獣と神、とに見る見方だ。それだけ一々疑問を入れながら読むことが出来る」（大正二年一月一六日付け志賀直哉宛の葉書、小学館全集第一八巻六五頁）。すなわち、武者小路はこの本に興味は引かれたが、どちらかというとドストエフスキーを霊の慧眼者、トルストイを肉の慧眼者とする図式的な捉え方、ドストエフスキーの肩をもち、トルストイに批判的なその書き方に不満の方が大きかったのである。当時多くの人たちがこのようなメレジコフスキーの意見をうのみした嫌いがあった中で、さすが武者小路は、トルストイ文学と精神を体得した人だけあって、このようなメレジコフスキーのトルストイ観に惑わされなかったのである。

「トルストイの偉大さは、その人間らしさにあると言へる。彼は珍しい程、自己を持つた男だつた。彼は他人のものに感心しない人間ではなかつた。実によく他人のものに感心もしたが、しかしそれは何処までも自分を生かす為だつた。彼は何処までも取るものは取り入れて自己流に生きた。だが彼の自己は大きかつた。そして彼は自己の目をもつて実によくあらゆる物を観察した。そして観察したものを実に正確に根気よく描写した」。これはトルストイのことではあるが、筆者にはそっくり武者小路自身にもあてはまると思っている。その先にはこう書いている。「彼は力のありあまる男だ、水量の多い大河のやうな男だ。大概の作家の作品は彼のそばにゆくと貧弱に見える。・・・彼の情熱、彼の想像力、観察力、描写力、皆異常である。（中略）人生の虚無を感じた点で彼と比肩し得るものとして、出家前の釈迦を持つて来ても誇張にはならない。それから彼は自己を本当に救つたのだ。同時に我等にも、如何にせば自己を救へるかを教へてゐる、日本に新しい宗教的気運が起つたのも、実に彼の力だと言へる。（中略）彼は文学の大先生であると共に、人類の真の意味の教師であり、我等が生きる目標を示すものである」（小学館全集第一八巻四〇三頁）。武者小路のトルストイ心酔はまさにこの言葉の通りだったのだ。それでいてトルストイに全面的に追随することができ

ないとすれば、トルストイ主義実践のためには余りに多くのことが求められ、多くの努力が必要だったからであろう。

晩年の昭和二六年執筆の『人類の意志に就て』においてはその傾向はさらに大きくなっている。そこでは個人、自己というものの主張は極力抑制されるようになっている。「僕はかう思つてゐる。人間生活に於ては個人の生命はそのもののために存在するのではなく、人類全体の生長のためにあるのだと」（第二四巻一六一頁）。彼は「自分と云ふものは、要するに自分をつくつたものの意志に支配されて生きてゐる」と考える。「・・・その自分は自分の為に生きてゐるのか、自分中心で生きてゐるのか、否さうではない、自分と云ふものは、何かの意志で生かされてゐるにすぎないので、その何かにとつては個人が目的ではないのだ。個人が目的としてつくられてゐると見れば人生は空である」「個人の為に個人はゐるのではなく、人類の生長の一分子として自然は個人を見、その為に都合のいゝやうに個人をつくつたのだ。だから個人が生き甲斐を感じるのは、この人類の生長の一分子としての自己の使命を果す時に限るやうに人間はつくられてゐると思ふのだ」（第二四巻二三一頁）。

そこでは全体との調和、あるいは自己完成といったことが前にまして強調されるようになっている。「・・・全体と調和がとれた人は、すべての人の生命を尊重することを知り、彼の考へることは衆生であり、人類であり、天国であるのだ。其処ではすべての人の生命が完成されることが望まれるのである。／この全体との調和がとれた人で始めて、他人とも調和がとれるのである」（一八〇頁）。

かくして人生の目的は人類の生長にあるということになる。われわれの理想はすべての人が生き、すべての人が自己完成に努力をし、この地上でなすべきことをして、天命を果たし、そして悠々と死んでゆくということになるのである（一八六頁）。

明治末以降トルストイから一定程度距離を置くようになった武者小路であったが、その晩年にはまたあたかも再びトルストイへの思慕・敬愛を深めたかのようであった。彼はトルストイを懐かしみ、特に戦後書いた物の中では武者

小路はよくトルストイを肯定するようになっているのである。昭和二二年執筆の『愛と人生』の中ではこう語っている。自分は失恋して閉口しているときにトルストイに出会って救われた。「・・・その時トルストイによつて、本当の愛はどう生かさなければならないかを教はり、自分はトルストイで救はれたと思ひ、トルストイの教へをのべ伝へるのが、自分の仕事のやうに思つた。それと同時にトルストイを愛し、トルストイに逢つた夢を見、トルストイから写真をもらつて喜んだ夢を見たりした」（第二四巻四〇四頁）。

また、彼が六八歳の昭和二八年十月に発表したエッセー『我が生涯を顧みて人生を語る』の中では、若い頃の自己のトルストイ傾倒をほぼ全面的に肯定しているのである。武者小路はこう書いている。「・・・その時叔父からトルストイのものを読むことをすゝめられ、読んで一遍に感心してしまつた。／時がよかつたのである。恋愛でよびさまされて、満すことが出来なかつた真剣な愛が、人類愛に浄化されることを望んでゐたのだ。それだけで僕の淋しさは消えはしないが、真剣に生きないではゐられない気持は、トルストイで満された。自分の生活がまちがつてゐること、真剣に愛の生活に入らなければならないこと、人生の虚偽も、それから如何にしたら逃げ出せるか、いろ〳〵の点で、トルストイが言つてゐることは本当だと思つた」（第二四巻四三一頁）。若い彼は自分の生活も寄生的で間違っていると思うようになり、生活を正そうとしたのだった。「それから二三年僕はトルストイに夢中になり、自分の生活が居候的な生活で、他人の不幸の上につぎ木された生活だと思つた。それから逃れ出て、本当の生活をしたいと思つた。僕が新しき村の生活をしないと、をさまらない気持になつたのは、トルストイを読んだからである」（四三一頁）。彼は肉食を恥じ、労働しないことを恥じ、母親を困らせ、家出さえ考えたほどであった。

武者小路は酒を四〇位まで一滴も飲まず、今も殆ど飲まないし、煙草も吸わないのは、トルストイのお陰だと思っていると語っている。そして、「今でもトルストイを自分の第一の恩師と思つてゐることはまちがひない。／トルストイを知らなかつたら、僕の生活は随分変つてゐたらう。文学をやつたかどうかそれもわからない。政治家になつてゐ

たかも知れない」（四三二頁）、こう回想している。

「・・・僕は一五六から二十三四の間に大体その人の一生の基礎が出来るのだと思つてゐる。・・・殊にその時分読んだものが、その人の一生を支配するやうに思はれる。その点僕はトルストイを読んだことはよかつたと思つてゐる。トルストイの影響は当時、全世界的であつた。ローマン・ロラン、ガンヂーなぞもその一人である。日本でも随分多くの人がその影響を受けた。僕はその内の一人であるが、よき弟子であるとは思はないが、しかし僕にとつては、よかつたと思つてゐる」（第二四巻四三五頁）。

武者小路は文学・芸術の面においてよりもその思想や倫理の面において、そして生き方の面において、遙かに多くトルストイの影響を受けた。彼は公家の出自の者としてトルストイと同じような問題、社会的徒食者という同じ問題をかかえていたので、多くの点でトルストイと共通の問題意識をもつことになったのであった。「自分は労働しないで食つてゆくことを何んと云つても一番恥じる。この恥はトルストイから与えられた。この恥は自分の一生につきまとうであらう。そのすまない感じが又自分に愛他的の仕事をさせやうともする。自分はこの恥を直接になほすことが出来るやうな仕事があれば、自分の仕事以外の仕事でもする心算だ」（「自分の良心」小学館全集第三巻四五二頁）――結局は、若い時にトルストイから受けたこの想いが、彼の一生を決定したように筆者には思われるのである。まさしく彼の文学者としての出発点はトルストイと同じく自己の身分を恥じることだったのである。

一九二八（昭和二）年九月、トルストイ生誕百年にちなんで武者小路は論文「『我が懺悔』を中心として見たトルストイ」を書いている。彼はその中でこう述べているのである。「僕自身之をよみなほして、今更に感動した。皆、よくよんで知つてゐることではあつたが、しかし自分の生活を顧み、人生を思ひ、そして時々空虚になりかける気持を味はふことで、決心を新にし、生活をひきしめ、本気になつて仕事をしたいと云ふ気持になつてゐる時に『我が懺悔』をよみなほしたことはいゝことであつた」(47)。武者小路はこういう本こそ書くに値する本、人々に真に生きる道を示す

本だとつくづく思うのだった。そして、さらにトルストイの『人生論』をも読み、「自分の人生観は実に多くトルストイから得てゐること」を改めて知るのだった。自分の言いたいことがトルストイによってしつこく語られてことを改めて見て、今更のように彼は感心するのであった。そして、「自分の人生観の根本がトルストイと全く一致してゐることを感じる」(47)のであった。

このように武者小路はトルストイの意見にある時は注意深く耳を傾けある時は反発したが、反発した時でも彼はいずれにしろトルストイからあまり離れることはなく、それを基点にして彼の思想も活動も構築されることになったように筆者には思われるのである。それ故、これまで考察してきたことの結論として、筆者はおそらく武者小路こそトルストイを最もよく理解し、その生き方に共鳴し、自らもかなりの程度トルストイ的な生を実践したと言えるように思うのである。そして彼の中には多くの非トルストイ的なものがあったが、同時にトルストイ的なものの方がもっと多かったと考えるしだいである。

注

(1)『武者小路実篤研究―実篤と新しき村―』明治書院、平成九年一〇月一五日発行。このほかに〈新しき村〉に関しては、作家関川夏央が『武者小路実篤の「新しき村」と大正時代』を『文学界』の平成一〇年三月号から一〇月号まで八回にわたり連載している。大正期のユートピア志向と経済のせめぎ合いの中での有名作家のユートピア建設の試みとしての捉え方で興味深いが、〈新しき村〉についてはあまり新しいものはないであろう。

(2)「・・・今の世には正しい生活は出来ないと思ふ人に、貧弱かも知れないが砂漠の内に小さき泉の存在し得ることを信じる喜びを与へる事が出来ると思ふ・・・」などと述べている。新潮社全集第二三巻二四二頁。

(3)『トルストイ研究』大正七年八月号［第3巻第8号］、八月一日発行、三二～三三頁。

(4)「この道を歩く」序、武者小路実篤著、渡辺貫二編『新しき村の誕生と生長』財団法人新しき村発行、平成四年五月、二

二六頁から引用．

(5)「なぜ百姓の仕事を選んだか」上掲書一三三頁から引用。

(6)『武者小路実篤論――「新しき村」まで――』東京大学出版会、一九七四年二月、前者六〇頁、後者一〇四頁。

(7)例えば、大正七年八月の第二号には、木村荘太の訳でトルストイの改革方法「改革の三手段（トルストイ）」が掲載されているし、さらに、市橋善之助訳のトルストイの書簡「トルストイのヘンリー・ジョージの説の宣伝者に与へた手紙」が訳載されている。

(8)『トルストイ』講談社、昭和一一年、三九六頁。武者小路はトルストイの伝記については、この本に先立ち、雑誌『大調和』一九二八年七、八、一〇月号に、「レフ・トルストイ伝（一～三）」を掲載していた。

(9)P・ビリューコフ著『レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ伝』全四巻、国立図書出版所、モスクワーペテルブルグ、一九二二―二三年。ビリューコフ著、原久一郎訳『大トルストイ伝　一～三』新潮社、一九二七～二八年。ビリューコフ著、原久一郎訳『大トルストイ伝　一～三』筑摩書房社、一九六八～六九年。

(10)上掲『新しき村の誕生と生長』五七、五八頁。

(11)長野県の教員中村亮平は最初から〈村〉構想に賛同し土地選定を手伝い日向にまで行き、開村まもない大正八年四月に妻ともども教員生活をやめ、家や畑を売り払って二千円以上を寄付し（田畑を二千円、家を千円で処分したという）、一家五人が村の住民になった。しかし、その一年余後の九年七月に離村している。中村は離村後まもなく自伝『死したる麦』（洛陽堂、大正一一年九月）を書いている。

(12)財団法人新しき村（永見七郎）編『新しき村五十年』新しき村、昭和四三年／渡辺貫二編『新しき村の誕生と生長』、新しき村、一九九二年　／川島伝吉『日向の村の思い出』知性社、昭和三四年七月／中村亮平『死したる麦』洛陽堂、大正一一年／西島九州男『校正夜話』日本エディタースクール、昭和五七年。その他。木村、上野、清水の著書はあとで注に掲載。

(13)武者小路自身は手続きなどのために少し遅れて七年一二月初めに転居している。

(14)大津山の注(1)記載の著書八三頁。

(15)同書前者七六、七七、後者八五頁。

(16)「満三年に際して」上掲『新しき村の誕生と生長』一八一頁。最高時のその二、三年後には村の人口は四五、六人になっている。

(17) 大津山の注(1)記載の著書八二頁。なお、大津山は「新しき村の灯をまもり続けた村内会員はのべ、三、四〇〇人」位にのぼる、と書いている(同書九頁)。これはその後埼玉県毛呂山の〈新しき村〉の会員を含めてだと思われる。川島の書くところによると、この時〈村〉に住むことになったのは朝鮮人の李時華と鄭全硅であった(注(12)記載の書一九六頁から)。

(18) 上野満『協同農業四十年』家の光協会、昭和五〇年四月、二三頁。

(19) 伊藤信吉『ユートピア紀行』講談社、昭和四八年八月、前者二五四、二五五頁、後者二五六、二七三頁。

(20) 大津山の注(1)記載の著書九七頁。

(21) 木村荘太『魔の宴』朝日新聞、昭和二五年、二九八〜三〇五頁。この内紛では川島等の芸術重視派が木村たちの派と対立したのであるが、前者は常連として夜ごと武者小路の書斎兼応接間の部屋に集まり、先生をかこんで雑談したり、画集を見せてもらったりしていたのだった。その当の川島はこの対立をたいした事件とは受け止めず、木村さんが「村の生活は封建性を脱して民本主義でなければならない」という希望を述べると、先生はそれも結構だが、「村の思想はもつと広く、その生活ではいろいろな毛色の変つた個人をも平気で一緒に活かして行けるやうな大きなものな筈だ」と語ったという(川島の注(12)掲載書一二三〜一二五頁)。

(22) 大津山の注(1)記載の著書九七頁。

(23) 上野満の上掲書二四頁。

(24) 清水準蔵(韮山圭介)『山影(さんえい)――ある青春――』/『土とふるさとの文学全集』第一五巻、家の光協会、昭和五一年九月、一一九頁。清水は〈村〉の生活をリアリチックなタッチでかなり詳細に描出している。

(25) 大津山の注(1)記載の著書を参照。のちに脚本家として映画界で活躍し名の知られた小国英雄(青森県八戸出身)も青年時代〈村〉の住民であった。彼は一六歳位で大正九年に村入りし、かなり長く在住し、定かではないが、一二年頃村を離れているのではないかと思われる。しかし離村後も戦後までずっと村外会員であったと思われる。その後は東京地区などで〈村〉が催す講演会などの様々な会や行事によく名前が見られ、多分それらの組織者のひとり、積極的な参加

者であった。小国は昭和二年に雑誌『大調和』に一文「『我が懺悔』ノート」を寄稿している。これで見ると彼も当時はトルストイに傾倒していたものと思われる。実は筆者は、六〇年代中頃日ソ合作映画の制作を現場通訳として手伝った際に、小国さんがその映画の日本側の脚本家だったので、数回お目にかかっている。何か機縁のようなものを感じる次第である。

(26) 関川夏央「日向新しき村　関川夏央さんと行く」『朝日新聞』平成一〇年九月一八日付け、二五頁。関川の連載作品については注(1)を参照。

(27) 山川均「文芸家の理想村」『新日本』大正七年七月号。

(28) 大杉栄「武者小路実篤氏と新しき村の事業」『新潮』大正一一年五月号

(29) 『時事新報』大正八年三月二五―三〇日付け。

(30) 「武者小路兄へ」『中央公論』大正七年七月号／『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、昭和五五年、二〇九、二一〇頁から引用

(31) 有島の上掲論文、上掲全集、第七巻、二一〇頁

(32) 例えば、レーニンはトルストイをこう批判している。トルストイは農民の気分を忠実に反映したが、「・・・彼自身、その教義のうちに、農民の素朴さ、彼らの政治からの隔絶、彼らの神秘主義、世界からのがれようとする願望、〈悪にたいする無抵抗〉、資本主義と〈金権〉とにたいする無力な呪いを持ちこんでいる。・・・」（「エリ・エヌ・トルストイと現代の労働運動」）。「トルストイの教えは無条件に空想的であり、その内容からみれば、もっとも厳密な、もっとも深い意味で反動的である。・・・」（エリ・エヌ・トルストイとその時代」。前者はレーニン著、蔵原惟人、高橋勝之編訳『文化・文学・芸術論』上巻、大月書店、一九七〇年、二七〇、二八〇頁）

(33) 臼井吉見、「第二章、大正後期」『現代日本文学史』／『現代日本文学全集』別巻1、筑摩書房、昭和三四年、二四五、二五一頁。

(34) 『わが信仰はいずれにありや』（『宗教論』）河出全集第一四巻一三四～一三七頁参照。

(35) 『教義神学の批判』河出全集第一五巻四一、七〇等を参照。

(36) 上掲『新しき村の誕生と生長』一二七頁から引用。

(37)「この道を歩く」序『新しき村の誕生と生長』二二八頁から引用。
(38)「自分達の生活」『読売新聞』大正八・二・一六：大津山の注(1)記載の著書四〇頁。
(39)「新しき村の第三歳になるを祝して」(二〇・一)、上掲『新しき村の誕生と生長』一五六、一五七頁。
(40)「建設」(二〇・一二)上掲『新しき村の誕生と生長』一六四頁。
(41)『時事新報』大正七年五月二〇日付けと同月二五日付け。
(42)外山楢夫については、『新しき村五十年』財団法人新しき村発行、昭和四三年、一二五頁から。下村歳男「外村君を弔う」『新しき村通信』第六四号、『新しき村五十年』一二八頁から引用。
(43)清水準蔵(韮山圭介)の上掲書、九六頁。
(44)徳富蘆花は明治三六年兄蘇嶺と決別し、独立して『黒潮』を出版したが、その名高い巻頭の決別文の中で、彼は「余はユゴー、トルストイ、ゾラ諸大人の人道の大義を執り、・・・」(『蘆花全集』第七巻、蘆花全集刊行会、昭和四年、四頁から引用)と宣言していた。
(45)本多秋五『「白樺」派の文学』講談社、昭和二九年、一四二頁。
(46)柳富子『トルストイと日本』早稲田大学出版部、一九九八年九月発行、二〇九頁。同収録論文「武者小路の伝記小説『トルストイ』をめぐって」は一九九六年に発表されている。その論文の最後で氏は、武者小路と「・・・トルストイとの出会いの成就」はこの時ではなかったのかといった意見を述べておられる。
(47)本多の上掲書一四四頁。
(48)武者小路実篤「『我が懺悔』を中心として見たトルストイ」『改造』一九二八年八月号、一八、一九頁。